



Title	シベリア・極東ロシアにおける十月革命
Author(s)	原, 暉之; HARA, Teruyuki
Citation	スラヴ研究, 24, 75-125
Issue Date	1979-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5090
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00002586872.pdf



シベリア・極東ロシアにおける十月革命

原 暉 之

はじめに

- 1 二月革命後の連合体制
 - 2 ボリシェヴィキ党組織の自立
 - 3 ソヴェトの地域結合と革命化
 - 4 ソヴェト権力の成立
 - 5 「カザーク地域」におけるソヴェト権力の成立
 - 6 シベリア地方議会
- 補論 民族運動の展開
むすび

はじめに

1917年から1922年にかけて、シベリア・極東ロシアで展開された革命と反革命の歴史は、ロシア革命史・内戦史の不可分の一部をなしているばかりでなく、別の角度から視れば、東アジア現代史の重要な一環でもある。この地域が日本をはじめとする連合国軍事干渉の舞台となったこと、また朝鮮独立運動の策源地の一つでもあったことを考えただけでも、シベリア・極東ロシアでの革命と反革命が東アジア諸国の動向と密接な関係にあったことは明らかであろう。

ロシアの政治的中心部の動向に連動しつつ、この地域に固有の諸運動、さらにこの地域に隣接する諸地域からの諸作用をもその内に含み込んで展開された、シベリア・極東ロシアの革命と反革命の過程は、もとより多面的な解明を要する。本稿は、この複雑な過程の多面的な解明を目指しつつ、ひとまずその第一の局面として1917年3月から1918年初頭まで、すなわちこの地域でのツァーリズムの崩壊からソヴェト権力の成立までの過程—その総体が十月革命である—を通史的に考察しようとするものである。

次に本稿の対象とする空間的範囲について、用語法にも関連して若干の前置きを述べておく必要がある。

周知のように「シベリア(Сибирь)」の語義には「太平洋岸からウラル山脈に至る北部アジア一帯²⁾」を指す場合と、「西はウラルから東は太平洋の分水界まで³⁾」を指す場合とがあり、革命前は前者の用語法が、革命と内戦を経て今日のソ連では後者の用語法が支配的である。後者の場合、太平洋の分水界から東は「ソヴェト極東(Советский Дальний Восток)」ないし単に「極東」と呼び、シベリアから区別するのである。本稿では「極東」という用語は避け、かつて「極東露領」と呼んでいたことを想起して「極東ロシア」と呼

1) この点については、さしあたり、原暉之「ロシア革命、シベリア戦争と朝鮮独立運動」『ロシア革命論』(菊地昌典編、田畑書店、1977年)所収。

2) 『世界地名辞典・西洋編』(東京堂、1955年)、225ページ。

3) 『世界地名大事典』2(朝倉書店、1973年)、599-600ページ。

ぶことにする。「シベリア」は革命・内戦期、今日以上に両義的に使われていたので、ここでも広義と狭義とに使い分けるしかない。

さて本稿が対象とする広義のシベリアには、革命前、行政区画上、3つの総督府と12の県・州が置かれ、総督府は総督により、県・州は知事または軍務知事によって統轄されていた。また軍事区画は3つの軍管区に分けられていた。1914年段階におけるそれらの名称は次の通りである（括弧内は中心都市。併せて1916年段階の県・州人口を附記する）⁴⁾。

セミパラチンスク州（セミパラチンスク）	98万1400人	} スチュエーピ総督府（オムスク）	} オムスク軍管区（オムスク）
アクモリンスク州（オムクス）	152万8800人		
トボリンスク県（トボリンスク）	201万5900人		
トムスク県*（トムスク）	414万7300人		
エニセイ県（クラスノヤルスク）	99万8400人	} イルクーツク総督府（イルクーツク）	} イルクーツク軍管区（イルクーツク）
イルクーツク県（イルクーツク）	77万3200人		
ヤクーツク州（ヤクーツク）	27万1300人		
ザバイカル州（チタ）	89万6400人		
アムール州（ブラゴヴェシチェンスク）	33万7400人	} プリアムール総督府（ハバロフスク）	} プリアムール軍管区（ハバロフスク）
沿海州（ハバロフスク）	51万0300人		
サハリン州**（アレクサンドロフスク）	4万2500人		
カムチャトカ州（ペトロパヴロフスク）	4万1400人		

* トムスク県南部は1917年6月17日、アルタイ県（中心都市バルナウル）として分割された。

** 沿海州最北部ウドスキー郡とニコラエフスク=ナ=アムーレ（以下ニコラエフスクと略）市は1914年2月にサハリン州に合併となり、その後、1917年にサハリン州の中心都市はニコラエフスクに移された。

大雑把に言って、西シベリアはオーピ河とその支流の流域、東シベリアはエニセイ河・レナ河とその支流の流域、極東ロシアはアムール河とその支流の流域と太平洋沿岸地域を指すが、それらは上記の3軍管区の管轄地域に概ね合致すると言ってよい。

本稿は、もとより1200万平方キロもの面積をもつシベリア・極東ロシア全域を検討するのではなく、主としてシベリア横断鉄道沿いに点在する諸都市を中心に検討する。最も重要な行政的中心都市は、上記の表からも明らかなように、西シベリアではオムスク（1917年段階の人口⁵⁾11万3680人）、東シベリアではイルクーツク（9万0413人）、極東ロシアではハバロフスク（3万1513人）であり、これらの3地域での革命権力の成立はこの3都市の帰趨にかかっていたとも言えるが、十月革命の推進勢力の拠点として重要な役割を演じたのは、シベリアではクラスノヤルスク（7万0327人）、極東ロシアではヴラヂヴォストーク（10万9481人）であり、その動向は重視されねばならない。シベリア随一の文教都市で、シベリア地方主義運動の拠点トムスク（10万1129人）、協同組合運動の中心地で、行政的には1917年まで郡市ですらなかった新興都市ノヴォニコラエフスク（6万9827

4) 行政区画の変遷については、*СИЭ*, т. 13, стлб. 561-564; *ССЭ*, I, стлб. 20-27. を参照。人口は *И. И. Серебrennikov. Сибиреведение*, Харбин, 1920, стр. 67-68. によった。

5) *ССЭ*, I, стлб. 350, 705-706; Приморское областное земство, *Земский сборник*, Владивосток, 1918, стр. 41.

人、のちのノヴォシビルスク)、極東ロシアにおける反革命の拠点となったブラゴヴェンチェンスク(5万8799人)などの動向もそれぞれ重要である。さらに、以上の諸地域の外にあってロシア政府の管轄下に置かれていた、中東鉄道(中国名は東省鐵路)収用地帯(полоса отчуждения КВЖД)、とくにその中心都市ハルビン(7万6145人)の動向は沿海州やザバイカル州、広くはシベリア全体の革命・内戦に直接関連しており、考察の対象から除外することはできない。

今日のソ連の歴史学では広義のシベリアを一括して把える、例えば5巻本の『シベリア史』⁶⁾のような方法はむしろ例外であり、シベリアと極東ロシアについての研究は互いに他の領域を侵さないように別々に行なわれているかに見える。狭義のシベリアの十月革命については、1963年に刊行されたショールニコフの著作が今日の水準をつくったスタンダードなものである⁷⁾。極東ロシアについては、ポイコ=パーヴロフとソドルチュークの共著で1964年に刊行された研究書がすぐれている⁸⁾。

欧米での十月革命研究で特殊にこの地域を扱った論文は管見の限り量的にも質的にも限られたものである⁹⁾。

日本では長尾久氏の研究によって十月革命の全ロシア的全体像が明らかにされたが¹⁰⁾、残念ながら、またある意味では不思議なほど、シベリア・極東ロシアについての論及は断片的である。しかし十月革命の対抗関係に関する長尾氏の枠組は、この地域の十月革命を捉えようとする場合に基本的に重要であり、有効なものである。

日本にシベリア・極東ロシアの十月革命についてほとんど研究がないということは、日本が重大な関わりをもったこの地域の内戦と干渉戦、いわゆる「シベリア出兵」を振り返り、捉え直す際の立脚点の一つを欠いているということである。本稿の意図はそうした欠落部分をまずもって埋めることにある。以下では、できる限り基本的な史料に依拠しながら、内戦・干渉戦史の前提をなす基礎的な事実関係の確定と再構成に力点を置くことにする¹¹⁾。

1 二月革命後の連合体制

専制の崩壊

首都の二月革命は急速に全国各地に波及した。各地の民衆はそれを全面的に支持・歓迎し、地元の専制地方機構当局者の逮捕を要求した。シベリア・極東ロシアでは、スチューピ総督兼オムスク軍管区司令官スホムリーノフ(Н. А. Сухомлинов、元陸相の実弟)、イ

6) *История Сибири с древнейших времен до наших дней*, т. 1-5, Л., 1968.

7) М. М. Шорников, *Большевики Сибири в борьбе за победу Октябрьской революции*, Новосибирск, 1963. 研究史には、Его же, *Октябрьская революция в Сибири, Историко-география Советской Сибири (1917-1945 гг.)*, Новосибирск, 1968.

8) Д. И. Бойно-Павлов и Е. П. Сидорчук, *Так было на Дальнем Востоке*, М., 1964.

9) James W. Morley, "The Russian Revolution in the Amur Basin", *American Slavic and East European Review*, vol. 16 (Dec. 1957); Russel E. Snow, "The Russian Revolution of 1917-18 in Transbaikalia", *Soviet Studies*, vol. 23 (Oct. 1971).

10) 長尾久『ロシア十月革命の研究』(社会思想社, 1973年)。

11) 日付の表記は1918年1月末までは旧ロシア暦で、それ以後とロシア外および対外関係の事項については新旧両暦併記とする。

ルクーツク総督ピリツ (А. И. Пильц), 同軍管区司令官シキンスキー (Я. Ф. Шкинский), プリாமール総督ゴンドッチ (Н. Л. Гондатти), 同軍管区司令官ニシチェンコフ (Нищенков) らの將軍をはじめ, エニセイ県知事, ザバイカル州軍務知事兼ザバイカル・カザーク軍アタマン, サハリン州知事, オムスク・トムスク・ノヴォニコラエフスク・バルナウル・チタなどの守備隊長その他, 各地で行政・軍・憲兵・警察の当局者が逮捕された¹⁾。旧体制は各地で崩壊した。

新たな状況の到来にともない, 各地の社会主義者は新たに活動を開始した。1905年のクラスノヤルスクの武装蜂起のとき, 鉄道附属工場の青年労働者として武装行動隊結成に積極的に加わったボリス・シュミヤツキー (Б. З. Шумяцкий) は, 大戦中に投獄ののち召集されて, クラスノヤルスク守備隊の書写係を勤めていたが, 首都二月革命の情報を掴むや直ちに (3月2日から3日にかけての夜), 各兵營をまわって労兵ソヴェトへの代表選出を呼びかけている²⁾。また例えばイルクーツク県下の農村教員で大戦中に政治流刑囚との接触の中で社会民主黨員として成長し, 召集されてハルビン守備隊に配属となった少尉補リューチン (М. Н. Рютин) は, 二月革命の情報に接するや自分の部隊に赤旗を掲げて營倉に入れられたが, 兵士が群をなして押しかけたので釈放されている³⁾。

シベリアには多数の政治流刑囚が, 或いは都市とその周辺に, 或いはトゥルハンスクのような北極圏に近い僻地に居住していた。地域によっては彼らが都市の社会生活全般に顕著な役割を演じていた。例えばイルクーツクでは周辺の政治流刑囚たちが一時的滞在許可をえて市内で居住・活動し, 都市自治体の種々の事業の運営に「不可欠」の存在とすらなっていた。エスエルは同市の協同組合運動に影響力をもち, 取引所委員会, 市参事会, 食糧委員会などに責任ある地位を占めていた。メンシェヴィキはザバイカル鉄道消費者組合などの団体に進出していたし, またポリシェヴィキは合法活動の場として難民救済運動に力を注ぎ, 同派のヴォイチンスキー (В. С. Войтинский, この人物は二月革命後メンシェヴィキに転じた) とヴェリマン (В. И. Вельман) が全市難民保護部の正副議長を勤めていた⁴⁾。ノヴォニコラエフスクには二月革命前70人以上の政治流刑囚が居住していて, 協同組合組織などの団体に要職を占め, また地方紙『ゴロス・シベリ』の編集部すら掌握していた。第5回党大会でポリシェヴィキ系の中央委員となり, 流刑地でメンシェヴィキ解党派に転じた著名な歴史家ロシコフ (Н. А. Рожков) が, 同紙の実質上の編集者であった⁵⁾。

- 1) А. Н. Баталов, *Борьба большевиков за армию в Сибири (1916-февраль 1918 г.)*, Новосибирск, 1978, стр. 69-73; Бойко-Павлов и Сидорчук, *Указ. соч.*, стр. 32-33.
- 2) А. Ансон, 1905 год в Красноярске, *СО*, 1923, № 5-6, стр. 133; М. Фрумкин, Февраль-Октябрь 1917 г. в Красноярске, *ПР*, 1923, № 9 (21), стр. 142.
- 3) В. Вельман, Февральская революция в Сибири, *ПР*, 1925, № 3 (38), стр. 168; М. Иванов, Октябрь в Сибири, *ПР*, 1922, № 10, стр. 376.
- 4) В. Г. Архангельский, Первый месяц февральской революции 1917 г. в Иркутске, *ВС*, II (1927), стр. 46-48; Вельман, *Указ. соч.*, стр. 171.
- 5) Н. Тетерин, Новониколаевск в февральскую революцию, *СА*, 1927, № 1, стр. 24-26; Г. Г. Гушкин, Ново-Николаевская ссылка в начале революции, *Девятый вал. К десятилетию освобождения из царской каторги и ссылки*, М., 1927, стр. 105-106; Л. М. Горюшкин и др. *Новониколаевск в историческом прошлом (конец XIX-начало XX в.)*, Новосибирск, 1978, стр. 216.

政治流刑囚の中には動員で守備隊に勤務中の者もいた。ツァーリ政府は戦時の人的潤滑を打開する一方策として、1916年2月7日の勅令により、政治流刑囚を含む「審理・取調中の者および服役中の者」をも軍隊に召集するようになったからである。オーピ河をノヴォニコラエフスクから724キロ下った地点にあるナルイムの流刑地には、1913年からポリシェヴィキのフラクションが組織されており、ペトログラート・モスクワ・リガの労働者ポリシェヴィキが多かった所であるが、この政治流刑囚たちは、入隊して兵営内で宣伝煽動活動を行なうことを決議した。同年9月に行なわれたポリシェヴィキ・エスエル両フラク合同会議で、組織の名称を「社会主義軍人同盟 (Военно-социалистический союз)」とすることが決定された。召集は11月から実施され、多くはトムスク守備隊に配属された。トムスク守備隊内に形成された「同盟」ビュローは、ニコライ・ヤーコヴレフ (Н. Н. Яковлев)、コーサレフ (В. М. Косарев)、スミルノーフ (И. Н. Смирнов) (以上ポリシェヴィキ)、クドリャフツェフ (С. А. Кудрявцев) (エスエル) から構成された。「同盟」は非合法に印刷した戦争批判のビラを隊内に撒き、1917年2月までにもっぱら兵士から成る少くも200名のメンバーを擁して同守備隊内に絶大な権威を勝ち取るに至った⁶⁾。

二月革命時シベリアにどれだけの政治流刑囚がいたか明らかにできないが、1907年以後ここに送られた政治犯は毎年約6000人の規模だったとも言われる⁷⁾。専制の崩壊で解放された旧政治流刑囚の大量の存在はこの地域の事件の展開に独特の刻印を捺すことになる。

社会保安委員会の成立

首都の二月革命の報道が伝わると、主要各都市では、善後策を協議するために緊急に市会または社会諸団体代表を加えた拡大市会が召集された。西および東シベリアでは3月2日から4日にかけて、極東ロシアでは3日から6日にかけて主要各都市で開催された、そのような会議によって、既存の行政機構に代る新機関が形成された。イルクーツクでは「ベールイ・ドム」(総督官邸)に市会、取引所委員会、協同組合その他諸団体代表が召集された。その中にはエスエル有力幹部ゴーツ (А. Р. Гоц)、メンシェヴィキ有力幹部ツェレチェリ (И. Г. Церетели) をはじめ社会主義者も多数含まれていた。形成された社会団体委員会 (Комитет общественных организаций) は、社会主義者の提案で、自らを地方最高権力であると宣言した。社会団体委執行委員会の構成は、エスエル10名、商工業者(多くはカデット)9名、メンシェヴィキ4名、メジライオンツイ1名(これはのちの中国大使カラハーン [Л. М. Карахан])、ポリシェヴィキ1名(これは労働者党员レベヂェフ [С. И. Лебедев])であった。議長にはツェレチェリが選出された⁸⁾。ノヴォニコラエフスクでは社会秩序保安委員会 (Комитет общественного порядка и безопасности) が形成された。これは『ゴーロス・シベリ』紙、戦時工業委員会労働者グループ、市会、協同組合、農業協会などの代表から成り、顔ぶれの75%は社会民主党とエスエル党のメンバーであった。議長にはエスエルのジェルナコフ (Н. Е. Жернаков) が選出された⁹⁾。クラスノヤ

6) В. Косарев, Военно-социалистический союз, *СО*, 1922, № 1, стр. 65-70; И. Смирнов, Февральская революция в Томске, *СА*, 1927, № 1, стр. 8; ССЭ, III, стлб. 667-669; Баталов, *Указ. соч.* стр. 54, 57.

7) ССЭ, II, стлб. 589.

8) Архангельский, *Указ. статья*, стр. 50.

9) Тетерин, *Указ. статья*, стр. 25.

ルスクでは社会保安委員会 (Комитет общественной безопасности) が形成された。これは市会から7名, 社会団体から各2名, 教育機関から計3名の代表によって構成され, 議長にはエヌエスで医師協会のリーダー格クルトフスキー (В. М. Крутовский, のちの臨時シベリア政府内相), 副議長にエスエルでエニセイ県消費生協連合書記グレーヴィチ (В. Я. Гуревич) とポリシェヴィキのシリヒチュエル (А. Г. Шлихтер, のちのソヴェト政府食糧人民委員) が選ばれた¹⁰⁾。ヤクーツクでは諸政党・社会諸団体代表150名から成るヤクーツク社会保安委 (ЯКОБ) が形成された。その大部分は有産勢力を代表しており, ヤクーツ人は6人にすぎなかった。しかも同委員会の議長には, 第四国会ポリシェヴィキ議員で大戦中に投獄・流刑となったペトロフスキー (Г. И. Петровский) が選出された。第一革命期の党活動ゆえに逮捕され, ネルチンスクで苦役に服したのちヤクーツクに送られていたポリシェヴィキのヤロスラフスキー (Е. М. Ярославский) は政治流刑囚の一団を率いて市会に赴き, 権力を ЯКОБ に譲り渡すよう要求し, これを市会にのませている。州知事も ЯКОБ への権力譲渡に同意し, 守備隊長も ЯКОБ とともに行動する用意ありと表明した。3月5日に ЯКОБ はヤクーツ州長官 (управляющий) にペトロフスキーを選出した¹¹⁾。

しかし, 以上のように社会主義者が主要役職を占めるケースがすべてではない。オムスクの連合委員会 (Коалиционный комитет), チタ・ブラゴヴェシチェンスク・ヴラヂヴォストーク・ニコラエフスク・ペトロパヴロフスクの各社会保安委員会は, リベラルが議長となった。ポリシェヴィキが議長となったのはヤクーツクのほかに, ハバロフスクとアレクサンドロフスクの社会保安委員会であった (それぞれ, マールイシェフ [А. Малышев] とツァプコ [А. Т. Цапко])¹²⁾。

各県・州中心都市に形成された社会保安委員会 (この名称が多いので以下このように総称する) は, 県・州の権力掌握と, 中央に形成された臨時政府への服属を宣言した。それらは成立の当初からリベラルと社会主義者との連立政権という性格を帯び, シベリアのかなり多くの都市で (基本的に流刑地でなかった極東ロシアではそれほどではないが), 後者が有力な地位を占めたと言えよう。

社会保安委員会の旧体制に対する態度について言えば, 社会保安委を通じて旧行政・軍事当局者の逮捕が実施された例もあるし, 社会保安委の消極姿勢や調停工作に逆らって, ソヴェトのイニシャティヴによって実施された例もある。前者の場合にしても, 例えばイルクーツクにおける社会団体委を通じての総督らの逮捕が, 急進的雰囲気兵士大衆の自己運動の展開に対する危惧に発するものであったという事実¹³⁾は特徴的である。旧高官が逮捕されず, そのまま居すわったような例もあった。その最大の人物は, 1903年に就任して以来絶大な権力を握っていた中東鉄道長官ホールヴァト (Д. Л. Хорват) 将軍である。

10) В. Я. Гуревич, *Февральская революция в Красноярске*, ВС, II (1927), стр. 113, 120-121.

11) З. В. Гоголев, *Якутия на рубеже XIX-XX вв.*, Новосибирск, 1970, стр. 198-199; *ВОСРХ*, I, стр. 82, 98.

12) В. Соколов, *Февральский "переворот" в Чите*, СА, 1927, № 1, стр. 37; *Благовещенску сто лет. Сборник документов и материалов*, Благовещенск, 1959, док. 119, 123; Бойко-Павлов и Сидорчук, *Указ. соч.*, стр. 32-34; *ВОСРХ*, I, стр. 49, 113.

13) И. Г. Церетели, *Воспоминания о февральской революции*, Париж, 1963, I, стр. 17.

リベラルの弁護士アレクサンドロフ (В. И. Александров) を議長とするハルビン社会団体執行委員会は、同長官に副長官兼民政部長アフナーシェフ (М. Е. Афанасьев) 将軍と市警本部長の罷免を申し入れ、それを認めさせてはいる¹⁴⁾。ホールヴァット自身は副長官らの更迭だけで二月革命を乗り切ったのである。

ソヴェトの成立

社会保安委員会と並行して、ソヴェトが選出・形成された。ソヴェトの形成のされ方には、当初から労働者兵士（あるいは労働者軍人）ソヴェト（以下労兵あるいは労軍ソヴェトと略）という形をとったものと、労働者ソヴェトと兵士（軍人）ソヴェトとが別個に形成されて、かなり長期間統一されなかったものがある。オムスク、クラスノヤルスク、チタ、ヴラヂヴォストークは前者（単一型）、トムスクとイルクーツクは後者（分立型）であった。次にそれぞれのソヴェトの成立と、社会保安委に対する態度を概観する。

オムスク労軍ソヴェトは3月3日に結成され、情報活動の目的で、一時的とはしながらも連合委員会に代表を派遣するとともに、専制の機構を連合委員会によって置き代えることを決議した。議長にはメンシェヴィキ国際派のポポフ (К. А. Попов) が選出された¹⁵⁾。

クラスノヤルスクでは3月3日朝までに兵士代表部分が形成され、夕刻までに鉄道工場その他で選挙が進められて、その日労兵ソヴェト第1回会議が開かれた。議長にはメンシェヴィキ国際派のヤーコフ・ドゥブロヴィンスキー (Я. Ф. Дубровинский, 1913年に流刑地で命を絶った革命家ヨシフ [И. Ф. Дубровинский] の弟)、副議長にシュミャツキーが選出された¹⁶⁾。このソヴェトの労働者兵士に対する権威はきわめて高かった。そのため、社会保安委は、「権力を結集し、ソヴェトに組織された労働者兵士大衆に直接依拠せんとして」、ソヴェトとの連合機関を形成する必要があるとみなした¹⁷⁾。こうして連合執行ビュロー (Соединенное исполнительное бюро) が形成された。それは社会保安委・ソヴェト・市参事会の各代表から構成され、自らをクラスノヤルスク市とエニセイ県の最高権力であると宣言して、民警の編成、コミサールの派遣に乗り出した。シュミャツキーによれば、3月5日の晩に行なわれたソヴェトの会議で、こうした連合体制の成立に早くも批判の声が起こった。とくに旧当局者の逮捕問題をめぐって対立が表面化した。連合執行ビュローはソヴェトに対し逮捕を要求しないよう、中央からの指示を待つよう申し入れたのに対し、ソヴェトは連合執行ビュローが実行しないなら自らこれを行なう、との最後通牒を発し、守備隊兵士の武力によって知事・憲兵将校・市警本部長らを逮捕したのである¹⁸⁾。

チタでは3月5日に132名から成る労兵ソヴェトが成立し、議長にはポリシェヴィキのブレオブラジェンスキー (Е. А. Преображенский) が選出された。ここでもソヴェトは直ちに軍当局の逮捕を要求したのに対し、社会保安委はこれに消極的であり、両者のあいだの交渉は長びいた。結局、6日の同委内の革命的部分とソヴェトとの合同会議で逮捕実施

14) *Исторический обзор КВЖД, 1896-1923*, Харбин, 1923, стр. 600-601; 哈運資料, 297 ページ。

15) *ВОСРХ*, I, стр. 49; З. Н. Бурджалов, *Вторая русская революция. Москва, фронт, периферия*, М., 1971, стр. 323-324.

16) *ВОСРХ*, I, стр. 67; Фрумкин, *Указ. статья*, стр. 142.

17) Гуревич, *Указ. статья*, стр. 129.

18) Б. Шумяцкий, *Сибирь на путях к Октябрю*, М., 1927, стр. 8-9.

が決定され、社会保安委はこれを余儀なく事後承認したのである¹⁹⁾。

ヴラヂヴォストークでは3月5日に労軍ソヴェトが成立した。執行委員会は労軍各17名ずつで構成され、議長には当初ポリシェヴィキ支持でのちメンシェヴィキに移るゴリドブレイヒ (Гольдбрейх) が選ばれた²⁰⁾。

以上の都市の共通項として考えられるのは、労働者のかなりの集中である。シベリア幹線鉄道の基幹附属工場 (главные мастерские) はオムスク、クラスノヤルスク、チタにあった。ヴラヂヴォストークには6000人規模の車輛組立工場などがあった²¹⁾。

次に、分立型のトムスクとイルクーツクについて言えば、両市には労働者が比較的少なかった点で共通しているが、兵士ソヴェトの形成のされ方を全く異にしている。

まずトムスクにはシベリアではオムスク (6-9万人) に次ぐ5-7万人の兵員を擁する守備隊が存在し、しかもこの守備隊に社会主義軍人同盟の影響力が強かった。その影響力は、しかし、さし当り兵営内に限定されていたと見てよく、3月3日の兵士デモは「ライフルをもたず、隊形を組まず、革命歌もうたわずに」街頭を進み、学生との小競合 (旗のスローガン「平和万歳!」の縫い取りがちぎられている) に終わっている。同日の夕刻に行なわれた中隊代表者会議で兵士ソヴェトの結成が決まり、5日にかけて選挙が行なわれた。形成された兵士ソヴェト内での社会主義者軍人同盟の権威は高く、執行委員会メンバー9名のうち、「同盟」ビュローのヤーコヴレフ、コーサレフ、スミルノーフを含めて6名がポリシェヴィキであった。兵士ソヴェトは社会保安委に有力なポリシェヴィキを送り込み、社会保安委とのあいだに強い連携関係をつくり出した。社会保安委の指導部として議長ガン (Б. М. Ган) のもとに処理ビュロー (распорядительное бюро) が置かれたとき、兵士ソヴェトからヤーコヴレフ、「同盟」からショトマン (А. В. Шотман) がこれに加わった。社会保安委議長はこの2人のポリシェヴィキとの協議なしには重要問題を処理できなかった²²⁾。ここは労働者の少ない商業都市であり (鉄道附属工場は隔たった分岐駅タイガにあった)、労働者ソヴェトは遅れて3月29日に成立した²³⁾。

イルクーツクは東シベリアの行政中心地であり、チェレムホヴォ金鉱やレナ金鉱を周辺に控えての商業中心地であった。市内には労働者に比べて官吏や小ブルジョワジーが厚い層をなして存在した。イルクーツクの労働者ソヴェトは3月3日に形成され、鉄道労働者従業員代表約30名をはじめ、合計75-85名の代表で構成された。議長ゴリドマン (Л. И. Гольдман) 以下、メンシェヴィキが優勢を占めた。ポリシェヴィキで副議長に選出されたヴェリマンがのち書いているところによれば、同ソヴェト内には、ソヴェトの機能を限定し、社会団体委の一機関に転化させようとする志向が強く、例えば当初はソヴェト執行委員会に服属した民警は、力関係の変化によって完全に社会団体委に掌握されるに至っ

19) Соколов, Указ. статья, стр. 38-40.

20) ОРГВДВ, стр. 5; Бойко-Павлов и Сидорчук, Указ. соч., стр. 32.

21) 他の要因としてこれらの都市における第1革命期の尖鋭な反専制闘争の経験を挙げることもできるが、ここでは立ち入らない。この闘争についてはさしあたり、原暉之「シベリアにおける1905年革命」『初源』創刊号 (1970年) を参照していただきたい。

22) Баталов, Указ. соч. стр. 27-28, 72-73; Смирнов, Указ. статья, стр. 9-11; Б. Ган, Февральская революция в Томской губернии, СА, 1927, № 1, стр. 18.

23) ВОСРХ, I, стр. 326.

た。機構的にも、労働者ソヴェトは社会団体委執行委に5名の代表を送ることを3月11日に決めた。この5名のうち3名はポリシェヴィキであった。同執行委幹部会には当初ソヴェトからゴリドマン議長のみが出席したが、ポリシェヴィキ・フラクの要求でヴェリマン副議長も加わることになった²⁴⁾。こうしてイルクーツクのポリシェヴィキは、リベラルと社会主義者の連合関係の中に自ら積極的に加わっていったのである。他方、イルクーツクでは、軍人ソヴェトが社会団体委と将校のイニシヤティヴによって形成された。兵士大衆の自己運動展開への危惧が社会団体委幹部（ツェレチュリヤゴーツ）をして総督らの逮捕に向かわせたことを、すでに述べたが、ここでも同じ事情が作用している。すなわち、「部隊内における規律の紊乱と解体の現象は、社会団体委員会の側に、委員会と軍人との間により密接な関係を確立する必要があるとの考えを惹き起こした²⁵⁾」のである。同委員会のメンバーたるゴーツ、クラコヴェツキー（А. А. Краковецкий）、ブルヂェレル（А. А. Брудерер）（いずれもエスエル）は、エスエル党员将校たちとともに軍人ソヴェト結成のための発起人グループをつくった。彼らの呼びかけは熱狂的に支持され、3月5日に将校25名、下士卒57名から成る軍人ソヴェトが形成された。その執行委員会はエスエルが独占し、議長にはゴーツが選出された。3月下旬からは1905年以來のエスエルで将校同盟事件に連坐したことのある中尉クラコヴェツキーが議長となった²⁶⁾。社会団体委—将校層の系列下に組織された点で、イルクーツク軍人ソヴェトは、兵士ポリシェヴィキ主導のトムスク兵士ソヴェトと対照的であったと言えよう。従ってこのソヴェトには少尉補・下士官クラスが多く、「兵士の声はほとんど聞かれなかった²⁷⁾」という。

以上に例示した単一型と分立型の間形態として、労兵両ソヴェトが別個に形成されたのち間もなく一本化した例もあった。ノヴォニコラエフスク²⁸⁾、バルナウル²⁹⁾、ブラゴヴェンチェンスク³⁰⁾などはそれに当ると見てよいであろう。また、ハルビンでは3月4日（17日）に労働者ソヴェト（医師や商会従業員などからの代表も含み、議長にカデットの医師が選ばれた）、のち将校ソヴェト・兵士ソヴェトの3者が組織され、後2者が4月14日（27日）に合同したのち、6月9日（22日）に労兵ソヴェトに一本化した³¹⁾。

ハバロフスクでは兵士ソヴェトが3月4日に形成された³²⁾のに対して、労働者ソヴェトの形成は3月後半に持ち越された。当初、労働者は社会保安執行委勤労者部会に結集したからである³³⁾。ヤクーツクでも労働者ソヴェトが、兵士ソヴェトおよびカザーク・ソヴェ

24) Вельман, *Указ. статья*, стр. 185, 187, 192.

25) Архангельский, *Указ. статья*, стр. 52.

26) Вельман, *Указ. статья*, стр. 189-190. クラコヴェツキーについて, *ССЭ*, II, стлб. 991.

27) Я. Д. Янсон, Октябрьская революция и юнкерское восстание в Иркутске, *Кис*, 1932, № 11-12, стр. 307.

28) Тетерин, *Указ. статья*, стр. 26-27.

29) В. Николаев, Февральская революция на Алтае, *СА*, 1927, № 1, стр. 29-30; *БЗС*, док. 12.

30) Бурджалов, *Указ. соч.*, стр. 334-335.

31) В. Соломеник, Борьба за Советскую власть в полосе отчуждения КВЖД, *Дальистпарт*, III, стр. 52-53; 哈運資料, 300, 305 ページ.

32) *ОРГВДВ*, стр. 5.

33) Бурджалов, *Указ. соч.*, стр. 335.

トより遅れて、4月23日に形成された³⁴⁾。これはペトロフスキー、ヤロスラフスキー、オルジョニキゼ (Г. К. Орджоникидзе) から当地の有力ボリシェヴィキが社会保安委の活動に全力を注いでいたことと無関係ではなからう。

極東ロシアを除くシベリア4県4州で3月の1カ月間に69のソヴェトが形成された³⁵⁾。それらに極東ロシアを含めても、ボリシェヴィキが成立当初から優勢を占めたのはクラスノヤルスク労兵、トムスク兵士の両ソヴェトに限られた。すでに、それぞれの項で見たように、この両ソヴェトも含めてシベリア各地のソヴェトは成立時点から社会保安委に代表を派遣するか、連合組織を形成するかして、連合体制の一翼を担うことになった。

臨時政府コミサールの任命

臨時政府は成立直後に、県知事に代るものとして、ゼムストヴォの設置されている諸県では県参事会議長を県コミサールに任命することを決定した³⁶⁾。シベリアのようにゼムストヴォのない諸地域については、当該県(州)から選出された国会議員、国家評議会民選議員、または「地方社会と関係の深い社会活動家」の中から代表を任命・派遣した。シベリアに臨時政府から派遣されたのは、トボリスク県に第四国会トルドヴィキ議員ヂュビンスキー (В. И. Дзюбинский)、オムスクに国家評議会議員ラプチェフ (И. П. Лаптев)、トムスクとクラスノヤルスクに国家評議会議員ズバシェフ (Е. Л. Зубашев)、イルクーツクに地質学者プレオブラジェンスキー (П. И. Преображенский)、ザバイカル・アムール・沿海州に第四国会トルドヴィキ議員ルサーノフ (А. Н. Русанов) の5名であった³⁷⁾。

臨時政府から任命・派遣されたコミサールは不人気で、トムスク・クラスノヤルスク・イルクーツクを含む諸都市の社会保安委によって、ただし労働者兵士の圧力を受けて、彼らは追い返されたことが指摘されている³⁸⁾。ズバシェフはトムスク・エニセイ両県を巡回したのち首都に帰っており、プレオブラジェンスキーは4月初に別の職務(トルケスタン委員会メンバー)に発令されている³⁹⁾。結局上記5名のうち臨時政府コミサールに就任したのはルサーノフだけだったようである。ズバシェフは、しかし、回想の中で自分はコミサールとして派遣されたのではなく、各地から県・郡コミサールの候補者を推挙するよう説明・指導することを任務としていたのだと弁明している。エニセイ県コミサールにはクラスノヤルスク社会保安委議長クルトフスキーが就任した。トムスクでは臨時政府コミサール不要説が強く(その急先鋒がヤーコヴレフ)、県コミサールには難航の末、暫定的に社会保安委県政委員部メンバーでエスエルのヴォロゴツキー (П. В. Вологодский, のちの臨時シベリア政府首班) が任命されたのち、社会保安委議長ガンが就任した⁴⁰⁾。ヤクーツ

34) 諸説の考証も含めて、Гоголев, *Указ. соч.*, стр. 204.

35) うち労働者ソヴェトが32, 労兵ソヴェトが22, 労兵農ソヴェトが2, その他が13であった。Д. М. Зольников, *Рабочее движение в Сибири в 1917 г.*, Новосибирск, 1973, стр. 132. 極東ロシアを含めて3月中に67とする古い数字(例えば*История Сибири ...*, III, стр. 478)は過小である。

36) И. И. Минц, *История Великого Октября* (в 3 томах), М., 1967-1973, II, стр. 147.

37) Е. Л. Зубашев, *Моя командировка в Сибирь*, ВС, II (1927), стр. 95.

38) В. А. Соловьева, *Возникновение и первые месяцы двоевластия в Сибири (март-апрель 1917 г.)*, *Сибирь периода капитализма*, вып. 2, Новосибирск, 1965, стр. 169.

39) *ВОСРХ*, I, стр. 375.

40) Зубашев, *Указ. статья*, стр. 105-110.

シベリア・極東ロシアにおける十月革命

ク州コミサールには ЯКОБ 議長でボリシェヴィキのペトロフスキーが就任した（この点でペトロフスキーはのちに批判を受けた⁴¹⁾）。こうして各社会保安委の推挙する候補（概ね議長）が臨時政府の県（州）・郡コミサールとなったので、社会保安委は臨時政府の地方機構として位置づけられることになった。

臨時政府はまた、ホールヴァトを中東鉄道収用地帯コミサールに任命した。ハルビン社会保安執行委はホールヴァトに鉄道経営権を残して行政権を取上げる意図を当初もっていたようであるが、臨時政府によるこの発令によって、ホールヴァトの地位は強化されることになった⁴²⁾。

臨時政府の地方機構となった各地の社会保安委員会は、すでに見たように民衆代表機関であるソヴェトによってもその一翼を担われていた。この連合体制には、もとより矛盾が内包されており、民衆運動の阻止者として社会保安委が機能するとき、矛盾は表面化せざるをえないであろう。

2 ボリシェヴィキ党組織の自立

二月革命後、社会民主党諸組織が新たに合法組織として復活または発足した。シベリア・極東ロシアでは、それらの組織はほとんどすべて、メンシェヴィキとボリシェヴィキを内部に含む統一組織としての社会民主党（РСДРП）組織であり、そこからのボリシェヴィキ党（РСДРП/б/）組織の分離・自立は二月革命後の時点でまだ実現されておらず、以後の過程においても、それは緩慢であった。全国的に見ても、この地域における組織統一的傾向（объединенчество）は特徴的である。この傾向は、また協調主義（примиренчество）の反映でもあった。

次表は西および東シベリアにおける諸都市（ないし住民地点）におけるボリシェヴィキ党独自組織の成立時点を整理したものである¹⁾。1917年3-4月から各時点までは統一組織の時期であったこと（ただし所によって実態はより複雑である）を意味する。緩慢な過程の中で先駆的な位置を占めたのはクラスノヤルスクであり、ここを拠点にして東西両方向に独自組織形成の動きがシベリアに伝わっていったことがわかる。

1917年	
5月	(30日) クラスノヤルスク (エニセイ県)
6月	(5日) バルナウル (アルタイ県), ニジネウヂンスク (イルクーツク県)
7月	ズナメンスキー・ザヴォート, イランスク, カンスク, マクラコフスキー・ザヴォート, ミヌシンスク, タセーエヴォ (以上エニセイ県)
8月	(月末) アンジェルカ, スジェンカ, タイガ (以上トムスク県)
9月	(6日) トムスク, (14日) ノヴォニコラエフスク, パラビンスク=カインスク, マリインスク, タタルスク (以上トムスク県)
10月	(月初) ビイスク, ズメイノゴルスク, カーメニ, スラヴゴロト (以上アルタイ県), (12日) オムスク (アクモリンスク州), イルクーツク, チェレムホヴォ (以上イルクーツク県), (後半) ヴェルフネウヂンスク (ザバイカル州)
1918年初	トボリスク (トボリスク県)
2-3月	チタ (ザバイカル州)

41) シリャープニコフによって。А. Шляпников, *Семнадцатый год*, II, М., 1927, стр. 174.

42) 哈運資料, 302 ページ。

1) Шорников, *Указ. соч.*, стр. 566-581. より作表。

七月事件以前の党の状況——(A) クラスノヤルスク

クラスノヤルスクの РСДРП 組織の内部は、バイカーロフ (А. В. Байкалов) らメンシェヴィキ祖国防衛派, ドウブロヴィンスキー, ボグラト (Я. Е. Боград) らメンシェヴィキ国際派, オクーロフ (А. И. Окулов), シリヒチェル, フルムキン (М. А. Фрумкин), ヴェインバウム (Г. С. Вейнбаум) らポリシェヴィキ調停派, シュミャツキー, ロゴフ (А. Г. Рогов), ペロポリスキー (И. И. Белопольский), ヴァレンチン・ヤーコヴレフ (В. Н. Яковлев) らポリシェヴィキ・レーニン派に分かれていた。クラスノヤルスク市委員会は3月7日に選出され, ロゴフとバイカーロフを左右の両翼として, ドウブロヴィンスキー, オクーロフ, シリヒチェル, フルムキンら中間2派=統一派が多数を占めた²⁾。

クラスノヤルスクのポリシェヴィキによる自立的党組織形成の第1歩は, 二月革命直後の3月4-5日に召集された「自らを徹底的なポリシェヴィキとみなす同志たちの集会」にはじまる。この集会で, シュミャツキーらポリシェヴィキ・レーニン派は, 「ポリシェヴィキ・プラヴダ派 (большевики-правдисты)」を名のること, プルジョワジーとの連立に反対し, 「帝国主義戦争を内乱へ」のスローガンを主張すること, 中間派のそれと区別される独自の新聞を発行すること, РСДРП/б/ 中央と緊密に連絡をとること, などを取りきめ, さしあたりは РСДРП 内にとどまって分派活動を展開することを決定した³⁾。中間派の新聞とは, かつて1905年12月の「クラスノヤルスク共和国」の時期に発行され, 二月革命直後に復刊された市委員会機関紙『クラスノヤルスキー・ラボーチー』を指す。

プラヴダ派が РСДРП/б/ 中央との連絡を確立する最初の契機となったのは, トゥルハンスクの流刑地から首都に帰還する途中立ち寄った党幹部, スヴェルドローフ (Я. М. Свердлов)・ゴロシチョーキン (Ф. И. Голощекин) とのあいだに, 3月20-21日に行なわれた協議である。この協議で, РСДРП/б/ のクラスノヤルスク市組織形成, 他都市のポリシェヴィキとの連絡確立, なかんずく РСДРП 組織から自立した指導部としてのシベリア・ビュローの設置, その機関紙としての『シビルスカヤ・プラヴダ』の発刊が, 方針として確認され, スヴェルドローフはシベリア・ビュローに党中央委の一機関としての位置づけを与えるよう, 党中央委に提議することを約した。のち4月13日に中央委書記スターソヴァ (Е. Д. Стасова) の電報で, 中央委による承認が伝えられたので, 改めて党中央委シベリア・ビュロー (Сибирское бюро ЦК РСДРП/б/)⁴⁾ が正式に発足した。『シビルスカヤ・プラヴダ』は4月2日に刊行が開始された。シベリア・ビュローは自派の勢力結集のために, エニセイ県下のアチンスク・カンスク・エニセISK各市からも代表を集めて, 4月10-13日にプラヴダ派のエニセイ県協議会を開催し, 「臨時政府とソヴェトについて」その他の決議を採択した。

他方, 統一派の掌握するクラスノヤルスク市委員会のイニシヤティヴによって, 4月22-25日に РСДРП シベリア協議会が開催された。決議権をもつイルクーツク(1), オムスク(2), ノヴォニコラエフスク(1), トムスク(1), バルナウール(1), カンスク(2), ズナメンスキー・ザヴォート(1), クラスノヤルスク(4), アンジェルカ・スジェンカ両鉦

2) Фрумкин, Указ. статья, стр. 144.

3) Б. Шумяцкий, Указ. соч., стр. 5-7.

4) シベリア地方 (районное) ビュローとも称した。

(3) の代表と、評議権をもつニジネウヂンスク、マリンスク、タセーエヴォ、イランスク、クラスノヤルスク市組織ポーランド人支部（各1）の代表が参加した。シベリア・ビュローに決議権を与えよとする要求が多数の反対で否決されたので、プラヴダ派は自らの宣言を読み上げて退場した。この協議会では「臨時政府に対する態度について」などの決議が採択され、シベリアの РСДРП 組織は第1地方（チェリャビンスクからノヴォニコラエフスクまで、中心オムスク）、第2地方（ノヴォニコラエフスクからチェレムホヴォまで、中心クラスノヤルスク）、第3地方（チェレムホヴォ以東、中心イルクーツク）に3分割されることに決まり、その第2地方の指導部として中部シベリア地方ビュロー（Среднесибирское областное бюро）が次の構成で選出された。アンジェルカ・スジェンカ両鉱からチューチン（Ф. Г. Чучин）、トムスクからエヌ・ヤーコヴレフ、クラスノヤルスクからシリヒチュエル、ドゥブロヴィンスキー、オクーロフ、候補としてチェオドロヴィチ（И. А. Теодорович）とフルムキン⁵⁾。

こうしてクラスノヤルスクのプラヴダ派と統一派の組織上の対立は4月に深まった。ここで両派のこの時期までの諸決議を検討しておく。

まず、3月12日に300人を集めて開かれた РСДРП 組織の党员集会の決議は、臨時政府に対する「……の限りで（постольку, поскольку）」の、すなわち条件付きの支持の線を打ち出している⁶⁾。この路線はクラスノヤルスク労兵ソヴェトの路線ともなった。オクーロフによって提案され、138対104で採択された3月22日の同ソヴェトの決議は、臨時政府を「その構成からして帝国主義的ブルジョワジーの利害を表現する」ものとしつつ、その臨時政府に対する「間断なき圧力」と条件付き支持をうたっている。この決議は3月27日-4月20日の РСДРП/б/ 全ロシア党活動家会議で披露され、かつスターリン（И. В. Сталин）がそれに支持を表明したことで、今日よく知られている⁷⁾。戦争については、同ソヴェトは3月21日に136対91で決議を採択しているが、それは掠奪的戦争目的に反対しつつ、「銃を棄てよ」のスローガンは容れられぬとして敗戦主義を斥けている⁸⁾。レーニン帰還前のスターリンら党指導部との共通項はここにも現われている。

次に4月10-13日のプラヴダ派のエニセイ県協議会の決議「臨時政府とソヴェトについて」は、臨時政府を人民に敵対する「リベラル・ブルジョワジーおよび貴族階級の政府」と規定し、「臨時政府の階級の本質の暴露」と「ソヴェトの創出と支持」を最緊急課題として掲げつつ、ソヴェトとの関係を不明確にしたまま「臨時政府に代って蜂起人民によって推し出されるであろう臨時革命政府」をスローガンとするにとどまっている⁹⁾。

四月テーゼ以前のポリシェヴィキは、首都同様ここでも、調停派＝統一派とレーニン派とを問わず混迷の中にあつたのである。

5) ХГВС, стр. 35-36; ВОСРХ, I, стр. 556.

6) ВОСРХ, I, стр. 556.

7) Протоколы Всероссийского мартовского совещания партийных работников, ВИКПСС, 1962, № 5, стр. 112, 124 (примеч.); 決議全文は、*Там же*, стр. 113-114; ВОСР, После, док. 99, стр. 133-134; 次の史料集には削除がある。БЗС, док. 8. トムスク兵士ソヴェトも3月20日に臨時政府条件付き支持を決議している。Баталов, Указ. соч., стр. 85.

8) БЗС, док. 6.

9) *Там же*, док. 14; ВОСР, Апрель, док. 20.

四月テーゼの影響は、この直後の統一派のシベリア協議会の決議（4月22日）から現われはじめる。そこでは、臨時政府に圧力をかける戦術は誤りで、全権力をソヴェトに移すことを通じて反革命的臨時政府を「排除」し「打倒」することが語られている¹⁰⁾。

臨時政府に圧力をかける戦術が誤りであることを認めるなら、社会保安委に参加してきたことも当然、誤りとされねばならない。5月5日に РСДРП クラスノヤルスク市委員会は社会保安委および連合ビュローからの召還を決定した¹¹⁾。

統一派がこのように協調主義批判を強めつつあったとき、他方ではプラヴダ派が РСДРП/6/ 四月協議会の諸決定——そこでは国際主義者との「接近と統一」が決議された¹²⁾——に基づき、祖国防衛主義＝協調主義批判と国際主義者獲得の活動を進めていったので、四月テーゼと四月協議会の線に基づいた両派の再統一の展望が開かれた。しかし、その実現にはなおかなりの紆余曲折があった。

シベリア・ビュローは、РСДРП/6/ クラスノヤルスク市組織の結成集会を5月30日に設定し、それへ向けて「クラスノヤルスク・プラヴダ派の公開状」を発し、クラスノヤルスク市委員会の組織統一路線を批判、РСДРП/6/ 中央委の下への結集を呼びかけた¹³⁾。5月30日には統一派とプラヴダ派の2つの集会が同時に開催された。統一派の集会には350名が集まり、フルムキンが組織統一の維持、シベリア・ビュローによる分裂活動への非難を内容とする市委員会報告を行ない、この趣旨の決議が採択された。プラヴダ派の集会には100名が集まり、ヴェ・ヤーコヴレフが日和見主義からの訣別を主張するシベリア・ビュロー報告を行ない、РСДРП 組織からの脱退と РСДРП/6/ 組織の結成の決議が採択された¹⁴⁾。

その後、РСДРП クラスノヤルスク市組織に国際主義者と祖国防衛派の組織上の分裂が生じた。6月25日の組織総会で РСДРП/6/ 中央委承認決議が圧倒的多数で採択され、祖国防衛派は退場、以後別組織をつくった¹⁵⁾。

こうして、7月事件前夜までにクラスノヤルスクではポリシェヴィキ党中央に直結する強固な核が確立された。同市におけるポリシェヴィキの党勢は7月3日の市会選挙の結果に現わされた。すなわち、83議席中、ポリシェヴィキが41、エスエルが27、カデットが9であり、市長にソヴェト議長ドゥブロヴィンスキーが就任することになった¹⁶⁾。

七日事件以前の党の状況——(B) 他の諸都市

クラスノヤルスクに次いで統一組織に分裂が生じたのはバルナウルであった。ここでは祖国防衛派からの分裂が、数少ないシベリアからの四月協議会参加者プリジャーギン(И. В. Присягин)を中心に進められた結果、6月5日に祖国防衛派を含まない新委員会が

10) БЗС, док. 27-28; ХГВС, док. 3. 臨時政府の「排除」「打倒」は、四月テーゼにいう臨時政府を「いっさい支持せず」とも異っている。

11) БЗС, док. 31.

12) 『ロシア社会民主労働党(ボ)第七回(四月)全ロシア協議会議事録』(十月書房, 1978年), 216-218, 265ページ。

13) 全文は, БЗС, док. 41; ХГВС, док. 6; ВОСР, Май-июнь, док. 41.

14) Шорников, Указ. соч., стр. 233-238.

15) БЗС, док. 52, 54; ВОСРХ, II, стр. 413.

16) Фрумкин, Указ. статья, стр. 149.

成立した。ただし、この新組織は РСДРП 国際派統一組織と称しており、最終的に РСДРП/б/ 組織が形成されるのは9-10月のことである¹⁷⁾。トムスクでは6月にエヌ・ヤーコヴレフを中心にボリシェヴィキ・グループが形成され、РСДРП トムスク市委員会内で独自活動を開始した¹⁸⁾。オムスクでは6月11日に統一組織の集会で反祖国防衛主義の決議が採択された際に祖国防衛派が組織からの脱退を言明したが、メンシェヴィキ国際派の指導部のもとにさし当り統一が維持された¹⁹⁾。

イルーツクでは、ツェレチェリ、ヴァインシチェイン (С. Л. Вайнштейн, 1905年のペテルブルク・ソヴェト執行委メンバー)らの下にメンシェヴィキが強固であり(ただしこの2人はのち中央政界で活動)、他方ボリシェヴィキ内には組織統一的傾向と協調主義が強かった。3月19日に行なわれた最初の党员集会では、臨時政府に対する態度の問題をめぐって両派の決議がいずれも否決され、「……の限り」臨時政府支持という中間的決議が採択されている。3月22日の集会では戦争の問題をめぐって、対独戦争支持決議と即時停戦要求決議がともに否決されて、妥協的な表現の決議が通っている²⁰⁾。4月22-25日にクラスノヤルスクで開催された РСДРП シベリア協議会で、イルーツク代表は「プレハーノフともレーニンとも一個の党の枠内で立派に仲良くやっていける」と発言したが²¹⁾、これはイルーツクの統一組織の空気をよく伝えている。5月9日にイルーツクの統一組織総会は、臨時政府への社会主義者の入閣を了承する決議を採択しているが²²⁾、この問題をめぐって、入閣支持、クラスノヤルスクのボリシェヴィキに対する非難を主張するヤンソーン (Я. Д. Янсон)ら調停派と、入閣を激しく非難するレベヂェフや、イヴァノヴォ・ヴォズネセンスクの織布工出身のポーストゥイシェフ (П. П. Постышев)を先頭とする労働者ボリシェヴィキ・グループとの間に、鋭い対立が起こった²³⁾。しかし対立はさし当り組織分裂にまで至らなかった。

ザバイカル州では7月12日に РСДРП 州協議会が開催された。代表22名のうち10名がボリシェヴィキ、8名がメンシェヴィキ国際派、4名がメンシェヴィキ祖国防衛派であったが、議会制民主共和国への移行を内容とする「統治形態について」の決議が17対2対2で、すなわちボリシェヴィキの支持をも得て採択されていることに見られるように²⁴⁾、四月テーゼの路線がここではボリシェヴィキに伝達・認識されていなかった。

次に極東ロシアに眼を転ずる。

ヴラヂヴォストークでは3月10日に、ブラゴヴェシチェンスクでは3月12日に、ハバロフスクでは4月3日に、スーチャンでは4月7日に РСДРП 統一組織がそれぞれ形成された。ヴラヂヴォストーク市委員会は4月14日に約500人が出席した同市組織総会で

17) Зольников, Указ. соч., стр. 119.

18) БЗС, док. 51.

19) Зольников, Указ. соч., стр. 120. 決議全文は, БЗС, док. 46.

20) Вельман, Указ. статья, стр. 193-194.

21) Б. Шумяцкий, Указ. соч., стр. 28.

22) ВОСРХ, II, стр. 32.

23) Вельман, Указ. статья, стр. 199 (примеч. Н. Попова).

24) Шорников, Указ. соч., стр. 252-253. 協議会参加者については, П. Окунцов, 1917-18 гг. в г. Нерчинске и его уезде, Дальистпарт, I, стр. 122.

選出され、メンバー 11 名中 3 名がポリシェヴィキであったが、4 月から 7 月にかけて亡命先のアメリカ合衆国とオーストラリアから、ネイブート (А. Я. Нейбут), カルニン (А. Э. Калнин), クシナリョフ (И. Г. Кушнарєв), クラスノシチョーコフ (А. М. Краснощеков), また流刑地からニキーフォロフ (П. М. Никифоров), グーベリマン (М. И. Губельман) ら有数の活動家がヴラヂヴォストークに帰着したのでポリシェヴィキが強化された²⁵⁾。ネイブートは第一革命期にラトヴィアで活動し、1916 年にアメリカに亡命したレット人革命家で、帰国後、5 月にヴラヂヴォストーク市委員会議長に選出された。前世紀末にキーエフ、ニコラーエフ、エカチェリノスラフで活動し、1902 年から亡命先のアメリカで労働運動に参加した²⁶⁾クラスノシチョーコフは、ニコリスク=ウスリースキーに移って活動した。オーストラリアから帰国したカルニンはスーチャンの党組織の要請で 5 月にスーチャンに移って活動した²⁷⁾。ヴラヂヴォストークの巨大な車輛組立工場には、オーストラリアから帰国したクシナリョフが鋸締工として、ニキーフォロフが電気機械組立工として就職、ここがポリシェヴィキの拠点工場となった²⁸⁾。以上ポリシェヴィキ活動家のほかに、ヴラヂヴォストークの党とソヴェトで重要な役割を演じた人物にメンシェヴィキ国際派のスハーノフ (К. А. Суханов) がいた。スハーノフは 1912 年にペテルブルク帝大で学生集会を組織して逮捕されたことがあり、1916 年夏にメンシェヴィキ国際派の首都組織 (=メジライオンツイ) の委任をうけてヴラヂヴォストークに移り、秘密サークル「若きロシア」を組織して反戦活動のために同年 8 月に逮捕、二月革命の直前に釈放されたばかりであった²⁹⁾。

ハバロフスクでは РСДРП 統一組織の成立当初、ポリシェヴィキはマールイシェフ (社会保安委議長) とゴリオンコ (В. П. Голионко) の 2 名であった³⁰⁾。

アムール州では 6 月 10-19 日に РСДРП 州協議会が開催されたが、ポリシェヴィキは 2 名にとどまった³¹⁾。

ハルビンでは 6 月初にヴェレンゲイム (Веленгейм) なる人物が鉄道附属工場でポリシェヴィキのスローガンを掲げて、聴衆に罵倒される一幕があったことが知られている³²⁾。

7 月事件までの段階で、極東ロシア各地の統一組織は、ヴラヂヴォストークと、鉦山労働者の多いスーチャンを除いてどこもメンシェヴィキが多数派をなしていた。7 月 1 日に、ヴラヂヴォストーク、ハバロフスク (各 3)、ブラゴヴェシチェンスク、ニコリスク=ウスリースキー、ムラヴィヨフ=アムールスキー、ハルビン (各 1) からの代表を集めて、ハバ

25) Бойко-Павлов и Сидорчук, *Указ. соч.*, стр. 39-41; П. М. Никифоров, *Записки премьеры ДВР*, М., 1963, стр. 6-10.

26) Н. К. Norton, *The Far Eastern Republic of Siberia*, London, 1923, pp. 170-172.

27) А. М. Брандес-Федорина, Воспоминания о партийно-политической работе среди сучанцев, *ГВДВ*, стр. 84.

28) М. И. Шуликов, Большевицкий бастион, *Там же*, стр. 75-76.

29) Н. Бодрый, Костя Суханов, *Дальистпарт*, II, стр. 21-22.

30) П. В. Лехов, К истории приамурской организации РКП, *Там же*, I, стр. 142; В. Голионко, Партия и Советы в Хабаровске за период 1917-1918 гг., *Там же*, III, стр. 9.

31) Бойко-Павлов и Сидорчук, *Указ. соч.*, стр. 72.

32) М. Иванов, Октябрь в Сибири, *ПР*, 1922, № 10, стр. 378; Соломеник, *Указ. статья*, стр. 53.

ロフスクに РСДРП 第1回極東地方協議会が開催されたが、ウラヂヴォストーク代表のネイブート、スハーノフ、リュバルスキー (Н. М. Любарский) を除いて他は祖国防衛派であり、協調主義的な決議が採択された。ウラヂヴォストーク市委員会はハバロフスクにゲラシーモフ (Л. Е. Герасимов) を派遣するなど、極東ロシア諸都市にオルグ活動を強化した³³⁾。

七月事件以後の党の状況

七月事件のシベリアにおける展開は後段で述べることにして、ここでは、それ以後のポリシェヴィキの自立化過程を概観しよう。

シベリア・ビュローはクラスノヤルスクとその周辺に独自組織を形成してきたポリシェヴィキの勢力結集をはかるために、7月16-19日に РСДРП/б/ エニセイ県協議会を開催した。この協議会にはクラスノヤルスク (党員 2500) のほか、カンスク (317)、アチンスク (113)、ズナメンスキー・ザヴォート (150)、イランスク (110)、タセーエヴォ (150)、マクラコフスキー・ザヴォート (70) から代表が参加した³⁴⁾。また、この協議会で選出された РСДРП/б/ クラスノヤルスク地方ビュローによって、8月6-12日にはエニセイ県下だけでなく、トムスク県、アルタイ県、イルクーツク県の一部(ニジネウヂンスク)からの諸組織の代表も結集する協議会が開催された。これは自らを「社会民主党国際派中部シベリア地方協議会 (Средне-Сибирская областная конференция с.-д. интернационалистов)」と称しているように³⁵⁾、ポリシェヴィキ党組織としての自立が完結していない統一組織からの代表を含むものであった。そうした統一組織がクラスノヤルスクのポリシェヴィキの主導下に結集したことの意義は大きく、中部シベリア地方ビュロー (上記クラスノヤルスク地方ビュローはこの協議会で改称された) メンバーのボクラトらの遊説とあいまって、トムスク県やアルタイ県下でのポリシェヴィキ党組織の成立は以後急速に進んだ。РСДРП トムスク市組織は9月6日に 53 対 9 対 9 で、ノヴォニコラエフスク市組織は9月14日に 86 対 22 で、РСДРП/б/ 中央委員会を上部機関として認めることを決議した³⁶⁾。

イルクーツクの統一組織は混沌をきわめていた。首都労働者兵士の七月決起に対し、同組織はこれを非難する決議を採択した³⁷⁾。この決議はヤンソーンが提案したもののようであり、より激烈な調子のメンシェヴィキ提案は否決され、ヤンソーン提案が採択されたことで、メンシェヴィキは激怒して組織を割って出たという³⁸⁾。そして短期間後に組織は再統一したようである。組織再統一は7月21-27日に行なわれた県協議会で 32 対 1 対 2 で決議されている³⁹⁾。決議は「プロレタリアートの利益は単一の労働者党の再興を要求する」と述べている⁴⁰⁾。同組織の分裂は憲法制定会議選挙の候補者名簿からツェレチェリを下ろ

33) ОРГВДВ, стр. 10; Никифоров, Указ. соч., стр. 17.

34) ВОСР, Июль, док. 151.

35) ВОСР, Август, док. 12.

36) ВОСРХ, III, стр. 521; IV, стр. 42; БЗС, док. 101, 106.

37) ХГВС, стр. 39.

38) ВОСР, Накануне, док. 76.

39) ВОСРХ, II, стр. 628. ヴェリマンはこの協議会を6月初としているが (Вельман, Указ. статья, стр. 199.) 誤りであろう。

40) Там же, стр. 200.

すよう、ボリシェヴィキが求めたことから発して、10月8日にボリシェヴィキの統一組織からの離脱、РСДРП/б/ 市委員会の発足となった⁴¹⁾。

西シベリアの中心都市オムスクでも、東シベリアのイルクーツク同様、ボリシェヴィキ組織の自立は10月に入ってから生じた。10月12日のオムスク市組織総会は366名中256名が РСДРП/б/ 中央委承認決議を支持、他の100名余が退場するという形で分裂した⁴²⁾。

極東ロシアでは9月5日にニコリスク=ウスリースキーに開催された РСДРП 第2回極東地方協議会で分裂が起こり、それが各組織に拡がるという形をとった。この協議会には約4700人の党員を擁する各統一組織を代表する15名(うちボリシェヴィキ8、メンシェヴィキ7)が参加した。ボリシェヴィキの決議案が反対2、保留3で採択された。4名のメンシェヴィキ祖国防衛派は退場し、3名の国際派はボリシェヴィキに合流したので、この時点から会議は РСДРП/б/ 第1回極東地方協議会と改称した。また指導部としての地方ビュローの機能はヴラヂヴォストーク市委員会に臨時に委ねられた。次いで9月14日、ヴラヂヴォストークの統一組織は78対16で同協議会の決定を支持することを決議、メンシェヴィキ国際派は第6回党大会の全決議を承認して РСДРП/б/ に入党し、他のメンシェヴィキは退場した。ハバロフスクでは9月24日にゲラシーモフを議長とする РСДРП/б/ 市委員会が成立し、ブラゴヴェシチェンスクでは10月6日に РСДРП/б/ 臨時市ビュローが成立した。各地のこうした独自組織の成立にはネイブートらの遊説が大きな役割を演じたとされている⁴³⁾。ハルビンでは7月末のイルクーツクの党協議会に参加したリューチンが統一組織からの離脱を主張、リューチンの周囲に形成されたボリシェヴィキ・グループが9月24日(新暦10月7日)に組織結成集会をもった⁴⁴⁾。

10月5-7日に РСДРП/б/ 第2回極東地方協議会がヴラヂヴォストークに開催された。15名の代表の中にはムラヴィヨフ=アムールスキー代表として朝鮮人女性ボリシェヴィキ、アレクサンドラ・キム (А. П. Ким) の名前も見える。各地を遊説して帰ったネイブートは報告の中で「広範な労働者兵士は二月革命が自分たちにとって無成果であることに深い不満を抱いていることが観察される」と述べた⁴⁵⁾。

以上、七月闘争の前後に分けてシベリア・極東ロシアにおける党の状況を検討してきた。党組織形成の全体としての立ち遅れ、内部的には著しい不均等と多様性がこの地域の特徴と言ってよいであろう。そしてこのことが次項で見るソヴェトの状況を大きく規定することになるであろう。

3 ソヴェトの地域結合と革命化

地域結合の形成

3月下旬にモスクワとサラトフでそれぞれ開催された労兵ソヴェト地方協議会の経験が先例となって、3月末、ペトログラートで開催された労兵ソヴェト全ロシア協議会においてソヴェトの地域結合の必要性が確認された。そこではまず、モスクワ(中央)、北部、

41) *ВОСР, Накануне*, док. 76.

42) *БЗС*, стр. 177 (примеч.).

43) *ВОСРХ*, III, стр. 482; Бойко-Павлов и Сидорчук, *Указ. соч.*, стр. 92-93.

44) Соломеник, *Указ. статья*, стр. 55; 哈運資料, 306 ページ.

45) *ВОСРХ*, IV, стр. 331; Бойко-Павлов и Сидорчук, *Указ. соч.*, стр. 94.

シベリア・極東ロシアにおける十月革命

カフカース、ウラル、アジア・ロシア、ドネツ、ヴォルガ流域、南部、西部の9地域におけるその形成が企図されたが、のち、4月半ばにペトログラート・ソヴェト執行委は13地域に整理し直し（南部を2分、アジア・ロシアをトルケスタンおよび東西シベリアに3分、沿バルト諸県を新設）、全国のソヴェトに地域結合形成と地方大会召集を通告した¹⁾。中央の意向では、西シベリア（中心オムスク）にはセミパラチンスク州、トムスク県、エニセイ県、アルタイ地方が入り、東シベリア（中心イルクーツク）にはイルクーツク県、チタ市、ヴェルフネウヂンスク市、ヴラヂヴォストーク市、アムール州、沿海州が入るものとされた²⁾。現実には4-5月に東西シベリアと極東ロシアの3地方大会が開催され、3つの地域結合が形成されることになった。4月7-13日にイルクーツクで開催された東シベリア労兵農ソヴェト大会で、極東を含めるペトログラート・ソヴェトの提案が討議されたが「地域が大きすぎる」として、この提案は否決されたからである。5月1-7日に、オムスクで西シベリア労兵ソヴェト大会、同時にハバロフスクで極東（またはプリアムール地方）労兵ソヴェト大会が開催された。西シベリアの地域結合の範囲はアクモリンスク・セミパラチンスク両州とトボリンスク・トムスク両県であるとされた。各ソヴェト大会はそれぞれの執行機関を選出したが、名称は次の通りであった。東シベリア・ソヴェト地方ビューロー（Окружное бюро）、西シベリア・ソヴェト地方（執行）委（Областной [исполн.] комитет）、極東ソヴェト地方委（Краевой комитет）³⁾。

3つの地域結合の範囲についていえば、それらは軍管区をそのまま踏襲したと言えよう（ただし極東地方大会にはハルビン・ソヴェトも参加した）。

各大会はいずれもエスエル・メンシェヴィキが多数を占めた。東シベリア地方大会では決議権をもつ132名、評議権をもつ37名の代表のうちボリシェヴィキは約15名を占めたにすぎず⁴⁾、極東地方大会では103名の代表のうちボリシェヴィキは10名余を占めたにすぎなかった⁵⁾。ボリシェヴィキが優勢のクラスノヤルスク労兵ソヴェトは、東シベリア地方大会をボイコットした⁶⁾。

3-4月にはアムール州、イルクーツク県、アクモリンスク州などで県（州）農民大会が開催され、農民ソヴェトが結成されており、西シベリアでは上記の労兵ソヴェト大会に先立って西シベリア農民ソヴェト大会が3月25-31日に開催されており、東シベリアでは上記のように農民ソヴェトが労兵ソヴェトと合同の地方大会をもった。極東ロシアでは地方農民ソヴェト大会は開かれず、州別に開かれたようである。ここでは農民ソヴェトの組織をめぐる問題には一切ふれないで置く。

3月末段階で69を算えたシベリア（極東ロシアを除く）のソヴェトはその後7カ月間に157に増加した。10月末段階の各県・州別のソヴェトは次のように分類される⁷⁾。

- 1) З. Л. Серебрякова, *Областные объединения Советов России (март 1917-декабрь 1918)*, М., 1977, стр. 21-29.
- 2) *ВОСРХ*, I, стр. 632.
- 3) *БЗС*, док. 32; *ВОСРХ*, I, стр. 402; *ОРГВДВ*, стр. 7-8.
- 4) Вельман, *Указ. статья*, стр. 198.
- 5) Бойко-Павлов и Сидорчук, *Указ. соч.*, стр. 71; Никифоров, *Указ. соч.*, стр. 8. 前者は15名, 後者は12名としている。
- 6) Шорников, *Указ. соч.*, стр. 290.
- 7) Зольников, *Указ. соч.*, стр. 133. からそのまま引用。

行政単位	ソヴェト の種類	労働者	労兵	労兵農	兵士	農民	計
トボリスク	県	1	9	-	-	3	13
アクモリンスク	州	3	3	-	1	4	11
セミパラチンスク	州	-	2	-	-	-	2
アルタイ	県	4	5	2	-	8	19
トムスク	県	10	8	-	1	8	27
エニセイ	県	7	7	3	1	22	40
イルクーツク	県	10	4	5	2	3	24
ザバイカル	州	10	4	4	-	1	19
ヤクーツク	州	1	-	-	1	-	2
計		46	42	14	6	49	157

革命派ソヴェトの成立と七月闘争

成立当初のシベリアの諸ソヴェトは、クラスノヤルスク労兵、トムスク兵士ソヴェトなどの例外をのぞき、すべて協調派に掌握されたこと、また重要な例外をなすこの両ソヴェトも、それらを掌握するポリシェヴィキ自身が協調主義を払拭できなかったために臨時政府条件つき支持の立場にあったことは、すでにふれた。この両ソヴェトが協調主義を棄て、「全権力をソヴェトへ」の路線に移ったのは、ポリシェヴィキによる四月テーゼの受容と、他方における四月危機・第1次連立内閣成立とが契機となった。クラスノヤルスク労兵ソヴェトは、5月9日の総会で連立問題を討議し、社会主義者の入閣は戦術上の誤りであるとの決議を採択した。次いで5月19日に、第1回全ロシア・ソヴェト大会へ出る代議員への付託要求書を採択し、その中で、戦争終結、全ロシア労兵農ソヴェトへの権力移行、農民・雇農ソヴェトの即時組織化、地主地などの没収を主張した。また、トムスク兵士ソヴェトもこのころ（5月19日から22日のあいだ）、臨時政府に不信任を表明、ソヴェトへの権力移行を要求する決議を採択した⁸⁾。

革命派ソヴェトの登場にともない、それらと、臨時政府およびそれを支持する協調派ソヴェトとの対抗関係が明確化・尖鋭化した。対立ははまず臨時政府の夏期攻勢をめぐって表面化した。6月25日にクラスノヤルスクで開かれた労働者兵士約1500人の集会は、ヴェ・ヤーコヴレフとベ・シュミツキーの報告ののち、攻勢反対、前線と銃後での反革命攻撃から革命を擁護せよ、全権力をソヴェトへ、と決議した⁹⁾。他方、6月24日に行なわれたイルクーツク労軍両ソヴェト合同会議では賛成10、反対多数で攻勢反対決議が否決され、攻勢歓迎の決議が反対10、保留7の賛成多数で採択されているし¹⁰⁾、同じころ（6月20-29日）にクラスノヤルスクで開催されたエニセイ県農民大会では国土防衛、軍の士気昂揚、連立政府支持、土地占拠非難などの決議がエスエル主導の下に採択されている¹¹⁾。

夏期攻勢をめぐって表面化した革命派と協調派の対立は、七月事件をめぐってさらに深

8) БЗС, док. 34; ВОСРХ, II, стр. 116.

9) ВОСР, Май-июнь, док. 500.

10) Там же, док. 175.

11) ВОСРХ, II, стр. 373.

まった。

シベリアにおける七月闘争は次のような展開を見せた¹²⁾。クラスノヤルスクのポリシェヴィキは7月3日、「資本家大臣打倒!」「全権力をソヴェトへ!」のスローガンで9日にデモを挙行し、市会勝利を祝うことを労働者兵士に呼びかけた。呼びかけは労働者兵士に広く支持された。7日、同市ソヴェト執行委の協調派メンバーは予定されているデモへの不参加を呼びかけた。7日から8日にかけての夜、執行委は3-5日の首都七月事件についての中央執行委の電報を受け取った。協調派は直ちに中傷ビラをまいた。ポリシェヴィキは中傷を暴露し、労働者兵士に堅忍不拔を説いて8日終日、工場・兵営をまわった。8日の晩、執行委は守備隊兵士集会を召集、労働者もこれに参加した。深夜、ポリシェヴィキ党組織の会議が開かれ、市会選挙勝利を祝うためだけでなく、「ピーテル労働者兵士のスローガンを支持するため」平和裡にデモを挙行することを再確認した。9日のデモには1万ないし1万1千の労働者兵士が参加した。トムスクでは7月7日の РСДРП 統一組織の会議で弾圧抗議デモを組織することが決定されたのち、兵士ソヴェトも首都労働者兵士の要求に連帯、臨時政府・中央執行委非難の決議を11日に採択、「反革命打倒!」「資本家大臣打倒!」「全権力をソヴェトへ!」のスローガンで非武装の抗議デモを組織するよう主張した。デモは14日に1万2千人が参加して挙行された。両市のほか、ノヴォニコラエフスクで9日に約1万5千人のデモが行われ、タイガ、イランスク、インノケンチエフスカヤの各駅で、7月に鉄道従業員の集会がもたれた。運動が昂揚したのはエニセイ・トムスク両県に限られた。オムスク、イルクーツク、ハバロフスク、ヤクーツク、ヴェルフネウヂンスク、ブラゴヴェンチェンスク、チタ、ヴラヂヴォストークなどのソヴェトは中央執行委・臨時政府支持を決議したのであった。

七月闘争後、クラスノヤルスクとトムスクの革命的地位は後退せず、強化された。クラスノヤルスクでは、「[臨時政府の] 県コミサール、クルトフスキーは誰にも認められていなかった。事実上の権力はソヴェトであった¹³⁾」。トムスクでは、守備隊兵士が7月29日と31日の兵士集会で、速かな全面講和締結と秘密条約公表、死刑導入とポリシェヴィキ弾圧に抗議、兵士の権利圧迫反対を決議し、兵士はソヴェトの副署ある命令にのみ服すと声明した。またトムスク兵士ソヴェトは30日、全ロシア労兵農ソヴェトへの権力移行の問題を決定するためのソヴェト大会を即時召集する必要がある、との決議を採択した¹⁴⁾。

クラスノヤルスクでは七月事件で深まった革命派と協調派の対立がエスエル党の分裂をもたらした。9日のデモに参加したエスエル左派メンバーはエスエル党組織から離脱し、独自の新聞『インテルナツィオナル』を発刊した¹⁵⁾。このとき同党から離脱した左派の重要人物に、セルゲイ・ラゾ (С. Г. Лазо) とアード・レベヂェヴァ (А. П. Лебедева) がいた。ラゾはモスクワ帝大の学生のとき召集され、1916年12月に少尉補としてクラスノヤルスクのシベリア狙撃兵予備第15連隊に着任、クラスノヤルスク労兵ソヴェト兵士部会の指導者として兵士の信望を集めていた人物である¹⁶⁾。

12) О. Н. Знаменский, *Июльский кризис 1917 года*. М.-Л., 1964, стр. 185-191.

13) Фрумкин, *Указ. статья*, стр. 148.

14) *ВОСРХ*, III, стр. 40, 55; *БЗС*, док. 71.

15) *ХГВС*, стр. 38.

16) Сергей Лазо. *Воспоминания и документы*, М., 1974, стр. 227.

エニセイ県とトムスク県以外の地域でも、臨時政府の弾圧政策に対する反撥から臨時政府批判を強めていったソヴェトは多かった。ウラヂヴォストーク労兵ソヴェトが好例である。そこではすでに6月の改選で400名中180名をポリシェヴィキ（とその同調者）が占めるまでになっていたが¹⁷⁾、協調派がなお強く、7月8日の総会で激論の末、首都労働者兵士非難決議を採択、また執行委員会は10日に中央執行委・臨時政府支持決議を採択している。しかし大衆のあいだにはこれを不満とする空気が強く、例えば9日のシベリア艦隊水兵総会は「全権力がソヴェトの手に移らぬ限りこのようなケースの可能性は除かれない」と決議、また18日の要塞砲兵の集会は死刑導入・検閲導入・ポリシェヴィキ逮捕・ポリシェヴィキ諸新聞閉鎖に反対する、と決議した。こうした大衆の動向を背景に、ウラヂヴォストーク労兵ソヴェトは19日と22日の総会でポリシェヴィキ提案の死刑導入反対・検閲導入反対の決議を採択している¹⁸⁾。

オムスク軍管区紛争

二月革命後、労働者統制と軍隊民主化は広範な労働者兵士によって要求され、実現されていった。労働者統制については、例えば先に見た7月9日と14日のクラスノヤルスク、ノヴォニコラエフスク、トムスクでの1万人以上の規模のデモにおいて、「生産に対する完全な労働者統制!」「生産と分配に対する民主的統制の確立!」が重要なスローガンとして掲げられたこと¹⁹⁾をここでは指摘するにとどめ、軍隊民主化をめぐる七月事件の時期、オムスク軍管区で拡大していた紛争にふれておきたい。

オムスク軍管区では、二月革命以後軍指揮に対する合議的兵士統制機関 (коллегиальный солдатский орган управления войсками) として、中隊委、連隊委、守備隊委が形成されたほか、旅団長の行動を統制する旅団コミサールという名の兵士代表 (トムスク守備隊ではエヌ・ヤーコブレフ、オムスク守備隊ではジッセルマン [М. Л. Зиссерман]) が選ばれたが、さらに5月初の西シベリア・ソヴェト大会で軍管区委 (Военно-окружной комитет=ВОКОМ) が設置された。その構成はメンシェヴィキとエスエルが大半を占めたが、議長のアザーロフ (И. П. Азаров) はメンシェヴィキ国際派であり、副議長の1人は兵士ポリシェヴィキのジッセルマンであった。二月革命後スホムリーノフに代ったグリゴリエフ (Г. В. Григорьев) 少将は、ВОКОМ の影響下に5月15日、「(1) 当該指揮官附属の諸委員会は何よりもまず全面的統制の機関である……。 (4) 個人権力 (единоличная власть) は廃止され当該委員会に移る」という、「合議指揮制の基本規程」を命令第286号として公布した。次いで中隊委・連隊委・守備隊委に関する規程、軍管区委に関する規程が公布されて、軍管区内のいかなる指揮官命令も兵士委員会の事前の了承なしには下しえないという状況が成立した。これに対し陸相ケレンスキー (А. Ф. Керенский) は軍管区司令官をきびしく叱責した。グリゴリエフはエスエル党に入党するなどして窮境を切りぬけようとした。ところがこの人物は第一革命後に革命的兵士多数に死刑を宣告したことがあるという前歴が暴露されたので、ВОКОМ とソヴェト地方委はこの軍管区司令官を7月5日に解任し、旧軍中將で二月革命後「人民の側に移った」軍管区参謀長のタウベ (А. А.

17) Бойко-Павлов и Сидорчук, Указ. соч., стр. 74.

18) ВОСРХ, II, стр. 536, 552, 614; ОРГВДВ, стр. 10-11.

19) Зольников, Указ. соч., стр. 315.

фон Таубе) を司令官職務代理に選んだ。他方ケレンスキーは軍管区検察官にメンヂェ (Г. К. Менде) 少将, 軍管区司令官にプレヂンスキー (М. Прединский) 大佐を任命・派遣して, 合議指揮制の解体, 「赤い将軍」タウベの解任を工作した。オムスク軍管区全体をまき込む革命派と協調派・臨時政府との闘争の展開ののち, プレヂンスキーはひとまずタウベの参謀長解任に成功するが, タウベを裁判にかける企図は挫折し, 各守備隊兵士のあいだにタウベ支持・プレヂンスキー解任の要求が強まり, 結着は第2回西シベリア・ソヴェト大会へ持ち越された。また, オムスクに臨時政府に忠実な部隊を集結しようとする (その際, ノヴォニコラエフスク守備隊に期待がかけられた), オムスクのエスエル幹部ヂェルベル (П. Я. Дербер) の企図も阻止された²⁰⁾。

イルクーツクの協調派の役割

東シベリアでは, 革命化するクラスノヤルスクと, 協調派の牙城イルクーツクの対立関係が七月事件以後ますます明確化した。イルクーツクの協調派の七月事件への対応について言えば, 社会団体執行委, 東シベリア・ソヴェト地方ビューロー, 労兵ソヴェト合同会議, 県農民ソヴェト委員会が首都労働者兵士決起非難を決議した。7月10日ごろ行なわれた社会団体委・ソヴェト執行委の合同総会で, 首都から到着したメンシェヴィキのブトケーヴィチ (Буткевич) と, とくにエスエルのクローリ (М. Кроль) が「ドイツの手先」を非難する報告を行なったのをうけて, 議長のエスエル, ヤークシェフ (И. А. Якушев) はイルクーツクの「敗戦主義者」に断乎たる措置をとること, とりわけトリリセル (М. А. Трилиссер) 編集の『ゴーロス・ソツィアルヂェモクラータ』の停刊, 労働委員部その他「敗戦主義者」の傾向の機関の解散を要求する決議を提案し, それが採択された²¹⁾。しかしこの決議は貫徹されなかったようである。

7月末に行なわれたイルクーツク市会の選挙は, エスエル 47, メンシェヴィキ 12, カデット 11, ボリシェヴィキ 11 票で, エスエルの圧勝に終わった²²⁾。東シベリア地方コミサールのクルーグリコフ (А. Н. Кругликов), 県コミサールのラヴローフ (К. П. Лавров), 軍管区司令官代理クラコヴェツキー, 軍人ソヴェト議長チモフェーエフ (Е. М. Тимофеев) はエスエルであった。また東シベリア・ソヴェト地方ビューロー議長のヂェルクノーフ (А. Н. Черкунов), 労働者ソヴェト議長ゴリドマンはメンシェヴィキであった。

臨時政府とイルクーツクの協調派指導部は「シベリアのクロンシュタット」, クラスノヤルスクの革命派弾圧のために, まず「公式には陸相に服属しつつ遊泳し, ソヴェトの指令をすべて実施していた²³⁾」という守備隊長アウエ (В. Г. Ауэ) 大佐を罷免して, トルストフ (Толстов) 大佐に代えた。エニセイ県の反革命勢力の拠点はクラスノヤルスク・カザーク大隊で, その隊長ソートニコフ (А. А. Сотников) はクラスノヤルスク守備隊委の議長でもあった。トルストフと守備隊委は, クラスノヤルスク労兵ソヴェトが8月1日の守備隊兵士集会の決議に基づき 3000 人の兵士を農作業(収穫の援助)に派遣した機会をとらえ,

20) Баталов, *Указ. соч.*, стр. 106-111, 145-149; Шорников, *Указ. соч.*, стр. 308-310, 352-353; В. С. Познанский, *Сибирский красный генерал*, Новосибирск, 1972, стр. 41-51.

21) *ВОСРХ*, II, стр. 517; Я. Шумяцкий, От Февраля к Октябрю в Иркутске, *Кис*, 1932, № 2, стр. 63-64.

22) *ВОСРХ*, III, стр. 48.

23) Фрумкин, *Указ. статья*, стр. 148.

この援農は国防を危くするものだと批判した。「無政府状態」鎮定、革命派武装解除を目的として、クラコヴェツキーは400人の部隊を率いてクラスノヤルスクに乗込んだ。クラスノヤルスク・ソヴェト執行委はラゾ、ヴェインバウムらの代表団を組織してイルクーツクの兵士に対し説得にあたった。その結果「懲罰遠征隊」は戦意を失った。クラコヴェツキーは何の成果も上げることができず、しかも8月21日に開催されたクラスノヤルスク労兵ソヴェト・市会・県農民ソヴェトの合同会議の席で、トルストフの解任とアウエの復職の要求をのんで、イルクーツクに帰らねばならなかった²⁴⁾。「シベリアのコルニーロフ反乱」はこうして革命派の勝利に終わった。

8月の「懲罰遠征隊」派遣に続いて、イルクーツクの協調派の反革命的役割が明らかにされた事件は、9月17日のイルクーツク守備隊兵士集会と21-22日の兵士決起に対して加えられた弾圧である。

9月17日の守備隊兵士集会を組織したのは、エルイギン (Ерыгин) を指導者とするアナキスト・グループであった²⁵⁾。アナキスト組織の核はアメリカから帰国して、主としてチェレムホヴォ 鉱に入った元政治亡命者たちであって、チェレムホヴォ 労兵ソヴェト執行委の構成は革命的サンディカリスト1、アナキスト=コムニスト6、無党派3であった²⁶⁾。集会においてこのグループは「兵士相互扶助無党派同盟 (Беспартийный союз взаимопомощи солдат=БСВС)」の結成を宣言し、臨時政府を激しく攻撃する演説を行なった。集会はアナキストの提案した決議を採択した。БСВСの要求には兵士の待遇改善のほかに、ブルジョワジーの前線への動員とその財産の没収も含まれていた。軍管区司令部はこの要求を拒絶したので、БСВСは上官の命令の拒否、出動と前線への動員拒否をもって回答した。これに対し協調派の軍人ソヴェト幹部と軍当局は、同ソヴェトに來た БСВС 代表団の逮捕をもって臨んだ。9月21日、シベリア狙撃兵予備第12連隊の兵士は集会を開き、逮捕に抗議して БСВС の要求が満たされるまでの任務拒否・動員拒否の実力行使に決起し、説得のために兵營に乗り込んだ軍管区司令官クラコヴェツキーを監禁した。軍人ソヴェトは士官学校生に同連隊の武装解除、司令官を命令した。士官学校生は砲撃ののちそれに成功した。この日、諸官衙・電信局・銀行・浮橋・「ペールイ・ドム」に士官学校生の歩哨が立てられた²⁷⁾。臨時政府と軍当局への不満をくすぶらせていた兵士は、他の9、10、11各連隊でも22日にかけて各個に自然発生的に決起したが、若干の交戦ののち短時間で鎮圧された。

兵士決起鎮圧後、イルクーツクの協調派は労・軍両ソヴェトに立脚しつつ「この時期の中西部シベリアの他のどんな都市にも例を見ぬレジームを樹立した²⁸⁾」。ケレンスキーはクラコヴェツキーに代えて腹心のサマーリン (С. Н. Самарин) 大佐を任命した。エスエルの軍人ソヴェトは、軍事権力を集中したサマーリンに盲従したとされているが²⁹⁾、また

24) Баталов, *Указ. соч.*, стр. 150-155; Шорников, *Указ. соч.*, стр. 395-399; Фрумкин, *Указ. статья*, стр. 148-149.

25) ХГВС, стр. 45.

26) М. А. Гудошников, *Очерки по истории гражданской войны в Сибири*, Иркутск, 1959, стр. 11.

27) *Там же*, 12-13; Баталов, *Указ. соч.*, стр. 186-187.

28) Б. Шумяцкий, *Указ. соч.*, стр. 39.

29) *Там же*; Баталов, *Указ. соч.*, стр. 188.

他方、エスエルは優柔不断なサマーリンに信頼を寄せず、市会の発議で「衛戍司令部」をつくり、軍人ソヴェト議長の統轄下に士官学校生に依拠して、市内の最高軍事権力は「衛戍司令部」であると宣言した、とも言われている³⁰⁾。革命派に対する対抗において臨時政府と協調派ソヴェトの結合は、いずれにせよ明白となった。

七月闘争以後のソヴェトの地域結合と革命化

東シベリアでクラスノヤルスクとイルクーツクの両勢力が対抗を深めていた8月、極東ロシアと西シベリアではそれぞれのソヴェト地方大会が開催された。まず8月3-12日に第2回極東労兵ソヴェト大会がハバロフスクで開催された。代議員86名の党派構成はエスエル32、メンシェヴィキ祖国防衛派15、メンシェヴィキ国際派10、ポリシェヴィキ13、無党派16で、エスエル党から左派グループがこの大会で離脱したため、ポリシェヴィキ提案の決議案が31票と追い上げるに至ったが、なお協調派の決議案が40票で採択された。選出された地方委員会の構成は右派エスエル9、メンシェヴィキ祖国防衛派4、左派エスエル2、メンシェヴィキ国際派5となった³¹⁾。

他方8月11-20日にオムスクで第2回西シベリア労兵ソヴェト大会が開催された。代議員106名(うち РСДРП が50、エスエルが56)のうち1/3を占めたボリシェヴィキにメンシェヴィキ国際派、エスエル左派が加わって多数派を形成し、協調派約30名は退場した。エヌ・ヤーコヴレフによって提案された、全権力のソヴェトへの移行、全ロシア労兵農ソヴェト大会の即時召集を内容とする決議が採択された³²⁾。大会はプレジンスキーの罷免を決議した³³⁾。

シベリアでは9-10月に РСДРП 統一組織からのボリシェヴィキの離脱・自立が、クラスノヤルスクのシベリア・ビュロー、中部シベリア地方ビュローのイニシャティヴによって進められたことはすでに見た。これと軌を一にして、ソヴェトも、改選などを通じて革命化を進めた。次表は極東ロシアを除くシベリアの主要ソヴェトの「ボリシェヴィキ化」の時点を整理したものである³⁴⁾。

1917年3月(形成時)	クラスノヤルスク労兵(エニセイ県), トムスク兵士(トムスク県)
4-5月	アチンスク兵士, エニセイスク労兵, カンスク労兵農(以上エニセイ県), スジェンカ労兵(トムスク県)
9月	バルナウル労兵, ビイスク労兵(以上アルタイ県), ミヌシンスク労兵(エニセイ県), トムスク労働者(労兵)(トムスク県)
11月	オムスク労兵(アクモリンスク州), イルクーツク軍人・同労働者(イルクーツク県), クルガン兵士(トボリスク県)
12月	ノヴォニコラエフスク労兵(トムスク県)
1918年1月	ズメイノゴルスク労兵, カーメニ労兵, スラヴゴロト労兵(以上アルタイ県), チュメーニ労軍農(トボリスク県)
2月	チタ労兵(ザバイカル州)
4月(新暦)	トボリスク労兵(トボリスク県)

30) Н. Алексеев, Иркутск в начале Октябрьской революции, *Кис*, 1932, № 11-12, стр. 297.

31) Бойко-Павлов и Сидорчук, *Указ. соч.*, стр. 82; *ВОСРХ*, III, стр. 86-87.

32) *ВОСРХ*, III, стр. 168-169; *БЗС*, док. 85.

33) Баталов, *Указ. соч.*, стр. 160. その後, コルニーロフ事件ののちにプレジンスキーの逮捕, 臨時政府アクモリンスク州コミサールとコルニーロフ派将軍・将校の解任が実施された。

34) Шорников, *Указ. соч.*, стр. 582-593. より作表。

ソヴェトの「ボリシェヴィキ化 (большевизация)」には左派エスエルなども協力しているので、この用語を字義通りにのみ解釈できぬ面もある。例えばカンスクでは早くから労兵農ソヴェトが形成され、この単一のソヴェトがゼムストヴォ設置を拒否してゼムストヴォの諸機能を自らに引き受けたり、守備隊兵士を(7月、おそらくクラスノヤルスクに先駆けて)援農に派遣したりしたことは、ボリシェヴィキと左派エスエル(その重要人物はエイデマン [Р. Ц. Эйдеман])が共同歩調をとったことによってはじめて可能となったと考えられるからである³⁵⁾。しかし、ひとまずこのように整理してみると、9月までの段階でクラスノヤルスクとトムスクの周辺地域で、革命化したソヴェトが次々に形成されたこと、東西シベリアの行政的中心都市たるイルクーツクとオムスクでのソヴェトの革命化は11月に持ち越されたことは明らかである。

クラスノヤルスクとトムスクの周辺地域のソヴェトの革命化には、そこでの党の自立過程と同様、クラスノヤルスクを中心とする独自の地域結合が重要な役割を演じた。9月6-10日にクラスノヤルスクで開催され、中部シベリア・ソヴェト・ビューローを選出した第1回中部シベリア労兵農ソヴェト大会がそれである。大会は全権力をソヴェトに要求する決議を満場一致で採択、また全シベリア・ソヴェト大会をイルクーツクに召集して全シベリアのソヴェト地域結合を創出することをも決定した。この大会の直後、トムスクでは労働者ソヴェトの改選が行なわれてボリシェヴィキが優位に立ったのをうけて、9月19日に労兵両ソヴェトの合同が決定され、ボリシェヴィキ5、エスエル国際派1、メンシェヴィキ1から成るトムスク労兵ソヴェト執行委が選出された。アルタイ県でも9月18-19日にバルナウルで労兵ソヴェト県大会が開催され、中部シベリア・ソヴェト大会の決議に同調した³⁶⁾。

革命派のイニシャティヴによる全シベリア・ソヴェト大会は10月16-24日にイルクーツクで開催されることになるが、それに対抗するように協調派のイニシャティヴによる第2回東シベリア・ソヴェト大会も同じくイルクーツクで10月11-12日に開催されることになり、ここがシベリア情勢全体の焦点となった。この2つの大会に向けて、クラスノヤルスク・ソヴェトは、ヴェ・ヤーコヴレフ、オクローフ、ベ・シュミャツキー、ヴェインバウム、ラゾ、レベヂェヴァら、錚々たるボリシェヴィキと左派エスエルの活動家を送り込み、協調派支配の「レジーム」下で工作を展開した。

第2回東シベリア・ソヴェト大会には115名の代表が出席した。ボリシェヴィキ32、左派エスエル15、右派エスエル45、メンシェヴィキ23(国際派を含む)という構成であった。地方ビューローの報告に対して、ボリシェヴィキは、8月の懲罰遠征隊派遣と9月の兵士決起鎮圧の責任を追及する地方ビューロー非難決議を提案したが否決され、地方ビューロー支持決議が採択された。ボリシェヴィキと左派エスエルは退場した³⁷⁾。

ツェントロシビーリの成立

第1回全シベリア・ソヴェト大会には、ヴラヂヴォストークからチューメーニまでの69ソヴェトの代表184名が参加した。出身母体別の構成は労兵ソヴェト28(72名)、労兵農ソ

35) Фрумкин, Указ. статья, стр. 143, 146.

36) ВОСРХ, IV, стр. 28, 97, 111; ВОСР, Сентябрь, док. 104, 144.

37) А. Абов, Октябрь в Восточной Сибири, СО, 1924, № 4, стр. 111-113.

シベリア・極東ロシアにおける十月革命

ヴェト 14 (52名), 労働者ソヴェト 13 (22名), 兵士ソヴェト 7 (19名), 農民ソヴェト 3 (5名), その他 4 (14名, 県ソヴェト連合代表)。党派構成はボリシェヴィキ 64, 左派エスエル 35, РСДРП 国際派 10, 右派エスエル 50, メンシェヴィキ (祖国防衛派) 11, アナキスト 2, ブンド 1, 無党派 11³⁸⁾。エニセイ県農民ソヴェトやカンスク郡農民ソヴェトだけでなく西シベリアのクルガン郡, ビイスク郡, その他の農民ソヴェトもボリシェヴィキを支持したので³⁹⁾, ボリシェヴィキ・左派エスエルのブロックが大会の多数を制した。ボリシェヴィキは大会に先立って自派の代議員会議, 事実上の第1回ボリシェヴィキ党全シベリア協議会を開いた。大会決議案の承認, РСДРП/б/ シベリア・ビュローの選出のほか, シベリア・ソヴェト中央執行委の設置計画の立案, その候補者リストの作成も, この会議で行なわれた⁴⁰⁾。

大会は次の条項を含むボリシェヴィキ決議案を 93 対 68 で採択した。「(1) ブルジョワジーとの一切の協調は断乎として排斥されねばならない。(2) 全ロシア労兵農ソヴェト大会は中央において, それに従い諸ソヴェトは地方において, 即時に権力を掌握せねばならない。権力移行のための闘争においてシベリアのソヴェトは全ロシア大会を積極的に支持する⁴¹⁾。」

エスエル右派は資格審査委で農民代表が不当に少ないと主張して斥けられ, 上記決議案の逐条審議では全ロシア労兵農ソヴェト大会なる呼称は不当であると主張して, これも斥けられたので退場した。

大会は最終日に, (全) シベリア・ソヴェト中央執行委 (ЦИК Советов [всей] Сибири) = ツェントロシベリ (Центросибирь) の設置を決定した。議長にはベ・シュミャツキー, 副議長にはエイヂェマンが選ばれた⁴²⁾。当初, ツェントロシベリはイルクーツクの「協調主義の大海」の中の「小オアシス」にすぎなかった, と一指導者は書いている⁴³⁾。

4. ソヴェト権力の成立

一般的展開構造

首都十月蜂起の情報は 10 月 26-27 日にシベリアに伝わった。

首都十月蜂起に呼応して, クラスノヤルスクでは直ちにソヴェト執行委緊急会議が開かれ, 同ソヴェト兵士部会議長のラゾに市内諸施設の占拠が委任された。ラゾの率いる兵士・赤衛隊は 10 月 28 日から 29 日にかけての夜, 特別の困難なしに重要諸施設を占領した¹⁾。権力を掌握したソヴェトは県人民委員部を設置した。11 月半ばまでにエニセイ県の大部分でソヴェト権力が樹立された。

ソヴェト内の革命派勢力が強固であったクラスノヤルスクとエニセイ県ではこうして順調に権力移行が進んだと言えるが, 他の諸地域では相当の紆余曲折と困難をともなった。

38) ХГВС, стр. 46-47; ВОСРХ, IV, стр. 465-466.

39) Б. Шумяцкий, Указ. соч., стр. 48-49.

40) Там же, стр. 46, 48.

41) Абов, Указ. статья, стр. 117.

42) Серебрякова, Указ. соч., стр. 81.

43) Абов, Указ. статья, стр. 119.

1) БУУСВ, стр. 66.

このことは11月に行なわれた憲法定会議選挙の結果によく現われている。まず、トボリスク・トムスク・アルタイ・エニセイ・イルクーツク・ザバイカル・プリアムール各選挙区の集計によってシベリア全域の状況を見ると、総計278万6700票のうち、エスエルが209万4800票(75%)、ボリシェヴィキが27万3900票(10%)、カデットが8万7500票(3%)であった²⁾。シベリアは中央黒土地帯とほぼ同率の高いエスエル支持率(約3/4)においてきわだっていた³⁾。次に、エスエル支持率がシベリア平均をかなり下回った地域として、エニセイ県とプリアムール(アムール・沿海・サハリン州が含まれる)の党派別得票数・率を挙げる(4政党以外は略す)⁴⁾。

	エニセイ	プリアムール
エスエル	230,867 (64.8%)	125,873 (56.1%)
ボリシェヴィキ	95,500 (26.5%)	43,534 (18.1%)
カデット	12,157 (3.4%)	17,799 (7.9%)
メンシェヴィキ	4,536 (1.2%)	16,772 (7.5%)

エニセイ県ではクラスノヤルスク市でボリシェヴィキ支持率が58.1%に達し、プリアムールではヴラヂヴォストーク市で49%に達した。ハバロフスク、ブラゴヴェンチェンスク市のボリシェヴィキ支持率はそれぞれ15.4%、18.9%に過ぎなかった。

以上両地域とは対照的に、アルタイ、トムスク、トボリスク県はエスエル支持率が3/4を越えた。農村的なシベリアの中の最も農村的な地域である⁵⁾。

イルクーツク市では、総計3万0380票中、ボリシェヴィキが1万1145票(36.7%)、エスエルが9908票(32.6%)、カデットが5669票(18.7%)、メンシェヴィキが1700票(5.6%)で⁶⁾、7月末の市会選挙と比較すればボリシェヴィキは相当に伸長したものの、エスエルとカデットはなお強固であった。

以上の断片的統計からだけでも、シベリア・極東ロシアでの都市革命としての十月革命の困難さと、その中でのクラスノヤルスク、次いでヴラヂヴォストークの位置、またイルクーツクやハバロフスクでの都市革命そのものの困難さが推測される。

西シベリアにおける十月革命

まずオムスクでは、10月28日にソヴェト総会が首都蜂起支持を決議、翌日に守備隊兵士が連帯デモを行なったが、ソヴェト執行委は権力掌握を決断せず、西シベリア・ソヴェト地方委は10月30日、首都蜂起批判、新政府不承認を表明した⁷⁾。これはオムスク・ソヴェトの指導部にメンシェヴィキ国際派が強かったためである。他方エスエルは「自由と秩序の祖国救済同盟」を組織した。カデットのジャルデツキー (В. А. Жардецкий),

2) В. И. Ленин, *Полное собрание сочинений*, т. 40, стр. 3.

3) О. Н. Знаменский, *Всероссийское Учредительное собрание. История созыва и политического крушения*, Л., 1976, стр. 280.

4) *БУУСВ*, стр. 218; Бойко-Павлов и Сидорчук, *Указ. соч.*, стр. 117-118.

5) 農村人口の構成比はシベリア全体で88%, 旧トムスク県で92%, トボリスク県で93%であった。Серебренников, *Указ. соч.*, стр. 70-71.

6) *БУУСВ*, стр. 486.

7) *Там же*, стр. 68, 83; Б. Шумяцкий, *Указ. соч.*, стр. 99-100.

エスエルのクリコフ (В. В. Куликов) らは士官学校生に働きかけて決起を促した。士官学校生は11月1日に反乱を起こし、軍管区参謀部を占領、ВОКОМメンバーを監禁した。しかし兵士・カザークが彼らに追従せず、反乱は短時間、無血裡に赤衛隊によって鎮圧された。オムスクの士官学校生反乱の指導者たちは、首都における士官学校生反乱について、その組織者の役割を演じた元イルクーツク軍管区司令官クラコヴェツキーから、ヴォロゴツキーを通じて情報を得ていたとされる⁸⁾。また士官学校生にとっての反乱の最大のモチーフは将校章を維持したいという志向であったという⁹⁾。いずれにせよ、士官学校生反乱の鎮圧にさいして動揺を示したソヴェト執行委に対して下部からの批判、改選要求が強まった。11月18-20日にソヴェト自体の改選が行なわれ、新しい構成はポリシェヴィキ100、メンシェヴィキ国際派32、社会民主党(=メンシェヴィキ)17、エスエル51、エヌエス3、無党派109、計312(労働者部会194、兵士部会118)となり、また11月30日に行なわれた執行委の改選で、ポリシェヴィキが18名中11名を占めることになった¹⁰⁾。12月に新執行委はスチューピ地方・アクモリンスク州委員部の形成を決定した¹¹⁾。

トムスク県では、トムスクとノヴォニコラエフスクの両労兵ソヴェトが12月6日と13日に権力の掌握を宣言した¹²⁾。これは後述するエスエル主導の緊急全シベリア地方大会がトムスクに開催された時期に合致している。トムスク・ソヴェトは12月15日に、「(1)緊急全シベリア地方大会に否定的態度を表明する、(2)同大会が権力をその手中に掌握しようと試みる場合はいかなる手段に訴えてでも徹底的にそれと闘う¹³⁾」と決議した。しかしトムスク・ソヴェトはシベリア地方大会によって発足した臨時シベリア地方評議会を解散させる力量を欠いていた。また12月30日にソヴェトは県ゼムストヴォ参事会との合同会議でポリシェヴィキ2、エスエル2から成るトムスク県委員部を選出した¹⁴⁾。これは形成のされ方や構成からして連立的性格のものとも見ることができる。従って同県におけるソヴェト権力の成立は、それが宣言されたにもかかわらず、こうした弱点を内包したまま翌年に持ち越されたと言うべきであろう。

トボリスク県では、県の行政中心で商業的な、しかも鉄道から200キロも離れた小都市、トボリスクが反革命側に掌握されたままであり、臨時政府県コミサールのピグナッチ (В. Н. Пигнатти) は「トボリスク市内は完全に秩序が保たれている。ソヴェトと守備隊、ロマノフ家警護隊は政府側である」と書くことができた¹⁵⁾。

ともあれ、12月2-10日に開催された第3回西シベリア労兵ソヴェト大会において、「西シベリア全域でのソヴェト権力組織化に即時着手すること」が確認された¹⁶⁾。

イルクーツクにおける十月革命

首都十月蜂起に対し、エスエル党イルクーツク市組織は10月28日の総会で、「(1) 纂

8) В. С. Познанский, *Очерки истории вооруженной борьбы Советов Сибири с контрреволюцией в 1917-1918 гг.*, Новосибирск, 1973, стр. 41.

9) М. Басов, К истории юнкерских восстаний в Сибири, *СО*, 1922, № 4, стр. 84.

10) *ВОСР, Шествие*, II, док. 223; *БЗС*, док. 147.

11) *БУУСВ*, стр. 562.

12) *Там же*, стр. 409, 465-466.

13) *ВОСР, Шествие*, II, док. 256.

14) *БУУСВ*, стр. 567.

15) Познанский, *Очерки истории вооруженной борьбы ...*, стр. 41.

16) *ВОСР, Шествие*, II, док. 248.

奪者のソヴェト権力を認めず、それに従わず、憲法制定会議の召集を要求する。…… (4) 自らの部署にとどまり、権力篡奪者の命令を顧慮することなく行動する。……¹⁷⁾」と決議した。同日、市会は臨時政府打倒の拳に抗議を表明するとともに「革命擁護委員会 (Комитет защиты революции)」結成を決定した。

革命派の動きとしては10月29日に開催された守備隊各部隊代表者会議がまず重要である。イルクーツク守備隊の主力はシベリア狙撃兵予備第9, 10, 11, 12連隊, 第718国民兵団で、ほかにカザーク大隊, 陸軍学校1, 士官学校3などで構成されていたが、この会議で狙撃兵各連隊と国民兵団の代表はソヴェトへの権力移行を主張、砲兵大隊代表も同調した。カザークと士官学校生はこれに反対した。結局、ツェントロシベリイ提案の決議が598票で採択された。エスエル・メンシェヴィキ提案は230票であった¹⁸⁾。9月21-22日の兵士決起の鎮圧後、この会議に至る1カ月余の経過において、兵士の急速なボリシェヴィキへの傾斜は顕著であった。ヤンソンは回想の中で「私自身もほとんど毎日部隊の中で演説することになったが、兵士の政治的気分は週ごとにと行ってよいほど変化していったのを観察することができた¹⁹⁾」と書いている。この経過で重要な役割を演じた兵士組織は「ヴォエンカ (Военка)」と呼ばれた非合法組織で、10月10日に結成会議をもち、ボリシェヴィキの指導の下に、(a) 武装解除されている各部隊兵士への即時武器返還、(b) 逮捕されている兵士運動指導者の釈放、(v) 将校中心の協調派軍人ソヴェトの解体と、単一労兵ソヴェトの部会としての兵士ソヴェトの創出、(r) 隊内の民主化と指揮官選挙制、(d) 労働者赤衛隊の組織に向けての全面協力と武器操作法の訓練援助、をスローガンとして組織活動を進めた²⁰⁾。「ヴォエンカ」の活動の成果は、曲馬館で開催された守備隊兵士の最初の公然集会での、上記スローガンを内容とする決議の圧倒的多数による採択²¹⁾、次いで上記29日の代表者会議での決議採択として現われたのであり、9月にはボリシェヴィキの影響力の欠如ゆえに協調派への不満をアナキストの指導に結びつけた兵士大衆が、10月末までにボリシェヴィキの指導を圧倒的に受け容れるに至った、と言えよう。

軍人ソヴェトの改選は11月1日に行なわれた²²⁾。その結果、ボリシェヴィキと左派エスエルが優位に立ち、その執行部である軍人執行委 (Исполнительная военная комиссия) の選挙でもボリシェヴィキが僅差ながら過半数を占めた。議長にはボリシェヴィキの軍医アレクセーエフ (Н. А. Алексеев) が選出された²³⁾。軍人執行委は、守備隊への命令権限は同委にのみ属し、「衛戍司令部」の命令は無効である、と決議した。他方、労働者ソヴェトの改選は、10月31日の労働者ソヴェトと工場委代表、労組代表の会議において98対7でそれが決議された²⁴⁾のち、11月15日に行なわれ²⁵⁾、その結果、ボリシェヴィキは労働

17) ХГВС, стр. 47.

18) Я. Шумяцкий, Указ. статья, стр. 70-71.

19) Янсон, Указ. статья, стр. 308.

20) Б. Шумяцкий, Указ. соч., стр. 41-42.

21) Там же, стр. 42-43; Гудошников, Указ. соч., стр. 14.

22) БУУСВ, стр. 118.

23) Алексеев, Указ. статья, стр. 298.

24) Я. Шумяцкий, Указ. статья, стр. 71-72.

25) Гудошников, Указ. соч., стр. 21.

者ソヴェトでも優位に立った。ヤンソンがその議長となった。両ソヴェトは19日に合同会議を開き、ポリシェヴィキ提案の決議が256対185対7で採択され、エスエル・メンシェヴィキ提案の決議は194対275対2で否決された。これによって両ソヴェトは統一され、軍事革命委員会が形成された。その翌日、軍事革命委は同委以外に他のいかなる最高権力もイルクーツクには存在しない、とのアピールを発した²⁶⁾。軍事革命委の構成は、ポリシェヴィキからヤンソン(議長)、ポーストウイシエフ、メリニコフ(V. Н. Мельников)、左派エスエルからタナナイコ(Д. Т. Тананайко)、バザルキン(М. П. Базаркин)の計5名であった²⁷⁾。

この間、臨時政府県コミサールのラヴローフ、エスエルのパーヴェル・ヤーコヴレフ(П. Д. Яковлев, のちのボルチャーク政府イルクーツク県知事)、スキペトロフ(Л. Н. Скипетров)大佐(のちセミョーノフ[Г. М. Семенов]の側近)らに率いられた「革命擁護委」は陸軍学校内に相当量の武器弾薬を運び込むなどの臨戦態勢をつくり出したので、軍事革命委は23日、軍管区参謀長ニキチン(М. П. Никитин, この人物もセミョーノフの側近となる)、スキペトロフらの逮捕に踏み切った。ところが、東シベリア・ソヴェト地方ビュローの抗議をうけて、ポリシェヴィキ党機関とツェントロソビエリは公然たる王党派のスキペトロフを除き釈放することを決定した²⁸⁾。これは装備の点で将校・カザーク・士官学校生側が優位に立っていたこと²⁹⁾を背景としている。赤衛隊の編成は開始されたばかりであったし、また官吏のサボタージュが徹底的に行なわれたために軍事革命委の権力はいまだ名目上にすぎなかった。この日、市会、県ゼムストヴォ委員会、РСДРП(=メンシェヴィキ)とエスエル党および両党のソヴェト・フラク、農民ソヴェト、郵便電信・政府諸施設・ザバイカル鉄道の各従業員組合が連名で、ポリシェヴィキの暴挙を非難するアピールを発した。軍事革命委は反革命勢力の合法的中心である市会の解散をもってこれに応えた³⁰⁾。

軍事革命委はそれが形成された日の翌日から「ペールイ・ドム」を本拠とした³¹⁾。同委は12月4日に、軍管区参謀部、同経理部、県食糧委、電信局、郵便局、出納局などの諸施設にコミサールを派遣、翌日、各士官学校に解散と武装解除を要求した³²⁾。この措置がとられた背景には、10日に予定されていた士官学校生の修了=将校昇進が莫大な経費を必要としたという事情と、もとより将校称号の廃止に関する人民委員会議布告があったのであるが、いずれにせよ、この措置を直接の契機として、8日、士官学校生の部隊は「ペールイ・ドム」を包囲・銃撃し、これによって熾烈な市街戦の口火が切られた。反革命側の武装勢力は、陸軍学校・士官学校・幼年学校(上級)の学校生、カザーク3個中隊、相当数の予備将校から成り、総勢1500ないし2000であった³³⁾。革命側は、装備において劣勢

26) Я. Шумяцкий. Указ. статья, стр. 72-73.

27) Б. Шумяцкий, Указ. соч., стр. 68; Янсон, Указ. статья, стр. 311. は別の人名を挙げている。

28) ХГВС, стр. 50-51; Б. Б. Шумяцкий, Указ. соч., стр. 69.

29) Я. Шумяцкий, Указ. статья, стр. 75; Гудошников, Указ. соч., стр. 23.

30) Б. Шумяцкий, Указ. соч., стр. 71.

31) Янсон, Указ. статья, стр. 312.

32) Гудошников, Указ. соч., стр. 24-25.

33) Там же, стр. 26.

な守備隊兵士と赤衛隊に、ツェントロシビーリの要請で派遣されたチェレムホヴォ、のちにクラスノヤルスクとカンスクからの増援部隊が加わった。またカフカース義勇兵として（本来は反革命的な意図から）編成された部隊のうち大多数の兵士が、革命側に合流し、特殊部隊を組んで、英雄的闘争を展開したことが知られている。その指導者が内戦期パルチザンの伝説的英雄、アナキストのカランダラシヴィーリ (Н. А. Каландарашвили) である³⁴⁾。戦闘は、双方から1000人ともいわれる死傷者を出して³⁵⁾、17日に締結された休戦協定まで続いた。休戦協定は、「革命擁護委」と軍事革命委はともに解散する、軍事革命委は全施設からコミサールを召還する、連立政権としての「県ソヴェト」（労働者ソヴェト・農民ソヴェト・県ゼムストヴォ・市会・従業員組合からの代表で構成）がイルクーツク県・市の権力を握る、士官学校は解散、陸軍学校は存続、他市の守備隊・赤衛隊の市外退去、などを内容としており³⁶⁾、明らかに革命側に不利な妥協であった。フルムキンによれば、カンスクからの700名、クラスノヤルスクからの500名の増援部隊はこの妥協を白紙に戻して無条件にソヴェト権力を樹立するよう要求した。「彼らの強硬な空気が一切の動揺を一掃した³⁷⁾」。「県ソヴェト」は18日か19日に1回だけ会議を開いて消滅した。士官学校生の反乱は、エイヂェマンとラゾの指揮する増援部隊を加えた革命派の総力によって21日に鎮圧され、市内にソヴェト権力が樹立された。

沿海州・ハルビン・サハリン州における十月革命

ヴラヂヴォストーク・ソヴェトはコルネーロフ反乱期の8月27-28日の執行委において、合同執行委の形成とそれへの権力移行を決議し、8月29日の合同執行委の権力掌握宣言をうけて、9月9日の総会において同宣言を承認していた³⁸⁾。この合同執行委とは、労兵ソヴェト執行委のほかに、農民ソヴェト執行ビュロー、シベリア艦隊中央委、労組中央ビュロー、鉄道員組合、さらには РСДРП・エスエル両党の代表、市参事会と市会幹部会をも含むもので³⁹⁾、一種の連立政権と見ることができる。従って、11月5日にソヴェトが執行委の改選を実施したことは8月末—9月初段階にとった連立路線を清算することを意味した、と見てよいであろう。改選された執行委は18日に中央ソヴェト政権支持を決議、29日には権力掌握を宣言した⁴⁰⁾。12月に入って同執行委は国立銀行などにコミサールを派遣したが、これは官吏のサボタージュを招いた。

協調派の強かったハバロフスク・ソヴェトは10月30日の総会でポリシェヴィキのゴリオンコ提案の首都革命支持決議を16対96対1で斥け、非難決議を96対16対2の圧倒的多数で採択した⁴¹⁾。これに対して11月下旬に入ってハバロフスクの兵器廠労働者・守備隊兵士・アムール河艦隊水兵らがソヴェト権力を要求して集会・デモを行ない、ソヴェト

34) Б. Шумяцкий, *Указ. соч.*, стр. 77.

35) *Там же*, стр. 86.

36) Гудошников, *Указ. соч.*, стр. 46-47.

37) Фрумкин, *Указ. статья*, стр. 150.

38) *ВОСРХ*, III, стр. 339-340, 529.

39) *ВОСР*, *Август*, док. 529. ゆえに同市・沿海州のコルネーロフ反乱期ソヴェト権力樹立説（例えば Никифоров, *Указ. соч.*, стр. 23.）は支持しがたい。

40) *ВОСР*, *Шествие*, II, док. 231, 241.

41) Голионко, *Указ. статья*, стр. 17-18.

に強く圧力をかけた。その結果、12月6日のソヴェト総会は中央ソヴェト政権承認を88対22対6で採択した。協調派はこれを不満として退場した。このソヴェト総会でポリシェヴィキと左派エスエルから成る臨時執行委が形成された⁴²⁾。

ハルビンでは、10月25日(11月7日)のソヴェト総会でポリシェヴィキのリューチンが権力掌握決議を提案したが、それは50対82で否決された⁴³⁾。労働者・兵士は11月7日(20日)の集会で中央ソヴェト政権承認を決議するなどして、ソヴェトに圧力をかけた。しかも状況は、一方における各国領事団(首席は日本総領事佐藤尚武)のホールヴァットに対する警察力増強の要請、他方における中央のソヴェト政権からのハルビン・ソヴェトに対する権力掌握の要請⁴⁴⁾という複雑な要因の交錯の中で、まず11月23日(12月6日)のソヴェト総会での多数派＝協調派の退場、11月29日(12月12日)の新構成のソヴェト(議長リューチン)による権力掌握宣言、さらに外務人民委員部の意向⁴⁵⁾をうけての、12月4日(17日)のソヴェトによるホールヴァット中東鉄道長官解任命令、というように急転回した。しかし成立したハルビンのソヴェト政権は短命に終わった。ホールヴァットは「一方に於ては鉄道従業員委員会と握手し、他方、支那軍隊を招致して過激派に当」らせた⁴⁶⁾。「利権回収の野心を実現せんとし」た中国当局は12月11日(24日)、第618および559国民兵団とリューチン、スラーヴィン(Б. Славин, 新長官)の兩名およびその同調者のハルビン退去を求める最後通牒を発し、翌日、中国軍はソヴェトを打倒し、国民兵団を包囲・銃撃ののち武装解除したからである⁴⁷⁾。

極東ロシアの革命派はその総力を結集してソヴェト権力を樹立するために、12月12-20日に第3回極東地方ソヴェト大会をハバロフスクに開催した。大会開会前夜の状況は、以上に概観したように、ヴラヂヴォストークでソヴェト執行委が権力掌握を宣言しており、ハバロフスクではソヴェト執行委の改選と権力掌握宣言がまだ実現されておらず、ハルビンでは権力掌握宣言を行なったソヴェトがホールヴァットと中国当局の結束によって危機に瀕していた。

臨時政府極東地方コミサールのルサーノフは、ハバロフスク・ソヴェト臨時執行委の成立と、ソヴェト大会の召集に対抗すべく12月11日、極東地方ゼムストヴォ・都市自治体代表大会(以下ゼムストヴォ大会と略)をハバロフスクに召集した。6月17日の臨時政府の法令で設置が決まったゼムストヴォの選挙は、この地域では8月にはじまり、12月までかかった。沿海・サハリン・カムチャトカの各州ゼムストヴォは未成立であった⁴⁸⁾。こ

42) *ВОСР, Шествие, II, док. 249.*

43) 哈運資料, 308 ページ。

44) 11月21日(12月4日)に届いたレーニンの電報によって。電文は、*Исторический обзор КВ-ЖД, стр. 594.* この要請の背景にあった意図は中国の食糧禁輸を打破することであった。この点については、*В. С. Познанский, В. И. Ленин и Советы Сибири (1917-1918), Новосибирск, 1977, стр. 25.*

45) 外務人民委員部は11月26日(12月9日)に臨時政府の外交代表の解任を各国に通告した。その後北京駐在クダシェフ公使とホールヴァット長官の解任を中国に通告した。*ДВП, I, док. 23, 26.*

46) 哈運資料, 319 ページ。

47) *Соломенник, Указ. статья, стр. 59-63.* 以上の経過については、関寛治「1917年ハルビン革命」『現代東アジア国際環境の誕生』(福村出版, 1969年)所収、に詳しい分析がある。

48) *Бойко-Павлов и Сидорчук, Указ. соч., стр. 130, 134.*

のゼムストヴォ大会には結局9名の代表が出席しただけであったが、ルサーノフはその場で選出された極東ゼムストヴォ自治体代表臨時ビュロー（Временное бюро земств и самоуправлений、以下ゼムストヴォ・ビュローと略）に権力を委ね、後者は極東ロシアにおける唯一の合法権力であると宣言した。この拳に対し、ハバロフスク・ソヴェトは同大会を不法とみなし、12日未明に赤衛隊・国民兵団兵士・アムール河艦隊水兵に市内要所の占領を命令した。ルサーノフは逮捕されたが、ゼムストヴォ・ビュローは革命派の弱いブラゴヴェンチェンスクへ逃亡し、同市で改めて権力掌握を宣言した⁴⁹⁾。

第3回極東地方ソヴェト大会の代議員184名の構成は、ポリシェヴィキ46、左派エスエル27、メンシェヴィキ9、無党派2であった。第2回大会で労兵ソヴェトと農民ソヴェトの合同が決議されていたが農民ソヴェト幹部はこれを無視し、第3回大会にも農民ソヴェト代表を派遣しなかった。大会は第2回全ロシア・ソヴェト大会の諸決定に同意し、極東ロシアにおけるソヴェト権力樹立を宣言した。最大の問題は政権の構成であった。この問題をめぐり、ヴラヂヴォストーク・ソヴェトと、成立したばかりの沿海州ゼムストヴォとのあいだに交渉があったことが、次の通信から知られる。

「十二月二十八日【旧暦15日】沿海州「ゼムストオ」ノ成立ニ当リ沿海州代官⁵⁰⁾ハ自ラ辞職シテ其職權ヲ該「ゼムストオ」ニ引渡サンコトヲ申出デ「ゼムストオ」ハ執行機関ノ成立ニ至ル迄引渡シノ延期ヲ求メタルガ二十九日【16日】浦潮労兵会ハ沿海州「ゼムストオ」ニ対シ沿海州ノ最高行政官府ノ組織ニ労兵会ノ割込ミヲ提案シ「ゼムストオ」ハ三十日【17日】沿海州最高官府トシテ「ゼムストオ」ヨリ二名、市会ヨリ一名、労兵会ヨリ二名、農民代表者会ヨリ一名ノ代表員ヨリ成ル「オブラストノイ【州】、ビュウロー」ノ組織ヲ可決セリ……⁵¹⁾」

すなわちソヴェト側が連立を申し入れ、ゼムストヴォ側はゼムストヴォ・市会から3名、労兵農ソヴェトから3名とする連立の具体案を提起したということである。これに対してソヴェト側は別の具体案を提起した。

「在「ハバロフスク」極東労農会ヨリ沿海州「ゼムストオ」ノ接受シタル電報ニ拠レバ該連合会ハ極東最高行政官府ノ設立に関シ沿海州「ゼムストオ」ノ提議ト少シク意見ヲ異ニシ労兵農会ヨリ各六名各州「ゼムストオ」ヨリ五名（黒竜州ヨリ二名、沿海州ヨリ二名、「サハリン」州ヨリ一名）都合二十三名ヨリ成ル極東中央執行委員会ヲ組織……スルコトヲ決議シ之レヲ沿海州「ゼムストオ」ニ通報ノ為四名ノ委員ヲ選挙シ該委員ヲ当地ニ向ケ出発シタル趣ナリ⁵²⁾」

大会参加者の回想によれば、ヴラヂヴォストーク・ソヴェト代表のスハーノフとリュバールスキーが提案したゼムストヴォ代表を含める案は満場一致で採択されたというが⁵³⁾、ソヴェトがゼムストヴォと権力を分有するのは原則からの逸脱であるとする、ブラゴヴェンチェンスク・ソヴェト代表ムーヒン（Ф. Н. Мухин）らの反対論が一部にはあったようである⁵⁴⁾。この決定により、1918年1月5日に発足した政権は、正式に極東地方労兵農ソヴェト自治体委員会（ДВ краевой комитет Советов р. с. и к. д. и самоуправлений）と称

49) Там же, стр. 134-135.

50) ルサーノフは逮捕の翌日に釈放されている。Голионко, Указ. статья, стр. 20.

51) 在ヴラヂヴォストーク菊池総領事発（1月2日/12月20日）本野外相宛第2号。西比利亞政情, I。

52) 菊池総領事発（1月7日/12月25日）本野外相宛第15号。同上。

53) П. Ф. Федорев, Воспоминания делегата краевых съездов Совета, ГВДВ, стр. 96.

54) Героические годы борьбы и побед. Дальний Восток в огне гражданской войны, М., 1968, стр. 30.

し(以下極東地方委と略)、農民ソヴェト代表の6は空席、アムール・サハリン両州ゼムストヴォは代表派遣を拒否したので、労兵ソヴェト代表の12名(党派構成はポリシェヴィキ8、左派エスエル4)と沿海州ゼムストヴォ代表2名(ともに農村教員、おそらく2名とも左派エスエル)によって構成された。議長にはクラスノシチョーコフが就任し、5つ置かれた委員部のうち食糧農業と教育の両委員部のコミサールにはゼムストヴォ代表の2名がふり当てられた⁵⁵⁾。ゼムストヴォとの権力分有は、農民ソヴェトの不参加が直接的理由であるが、住民のゼムストヴォに対するその段階での強い支持を無視できなかったことにもよるものであろう。

沿海州ゼムストヴォは12月24日に参事会選挙を行ない、議長にエスエルのニコリスクリスリースキー市長メドヴェージェフ(A. C. Медведев)が就任した⁵⁶⁾。

ハバロフスクでは12月20日にソヴェト執行委の改選が行なわれ、ポリシェヴィキのゲラシーモフを議長とし、ポリシェヴィキ・左派エスエル29名、メンシェヴィキ4名、無党派6名から成る新執行委が形成された⁵⁷⁾。

ニコラエフスクでは12月22日に第725国民兵団・砲兵・労働者らによる全権力をソヴェトへ移すよう要求するデモが行なわれたのち、1月12日にソヴェト執行委は同市とサハリン州の権力の掌握を決議した⁵⁸⁾。

極東地方委は1月13日に旧臨時政府コミサールの職を廃止した。すなわち、

「在「ハバロフスク」市労兵農極東委員会ハ一月二十六日[13日]付命令ヲ以テ極東ニ於ケル旧政府時代ノ「コムミッサリ」(代官)ヲ悉ク廃止シ是等「コムミッサリ」ハ一切ノ事務ヲ其所在地ノ労兵農会ニ引継クヘク若シ同会ノ設置ナキ地ハ「ゼムストウオ」(地方自治団)ニ引渡スヘキ旨ヲ公布⁵⁹⁾」したのである。これをうけてサハリン州ソヴェトは「一切ノ政権ヲ奪取セントシ州庁市庁郵便局其他ニ対シ政権引渡ヲ交渉」したが、州コミサールはソヴェトにでなく、ゼムストヴォに権力を移すと声明した。サハリン州の権力問題は以後しばらく結着がつかず、事実上4月までソヴェト執行委とゼムストヴォの連立政権が存続した⁶⁰⁾。

5 「カザーク地域」におけるソヴェト権力の成立

カザークとその内部対立

カザークは「本質において匪賊的な侵寇であった¹⁾」とされるロシア人のシベリア征服の先兵であり、当初はシベリアの都市・砦市・^{オストロク}国境線のほぼ唯一の武力であった。カザーク

55) Бойко-Павлов и Сидорчук, Указ. соч., стр. 142-143.

56) 菊池総領事発(1月11日/12月29日)本野外相宛第21号。西北利亜政情, I。

57) ОРГВДВ, стр. 63.

58) Бойко-Павлов и Сидорчук, Указ. соч., стр. 149.

59) 在ニコラエフスク石田虎松領事発(2月5日/1月23日)本野外相宛機密第4号, 西北利亜政情, I。

60) 本稿ではカムチャトカ州・ヤクーツク州については割愛する。カムチャトカ州の十月革命の基本文献は、А. А. Пурин, В дни революции в Охотско-Камчатском и Чукотско-Анадырском крае. 1917-1918 гг., ВС, II (1927), стр. 61-92; Б. И. Мухачев, Становление советской власти и борьба с иностранной экспансией на Северо-Востоке СССР, Новосибирск, 1975. Яクーツク州については、В. Виленский-Сибиряков, Октябрь в Якутской области, КуС, 1932, № 11-12, стр. 341-360.

1) バフルーシン(外務省調査局訳)『スラヴ民族の東漸』(1943年;復刻, 1971年), 58ページ。

には本来、都市に勤務して金銭食糧を支給される者と、自由地^{スロボダー}に住み土地分与と租税免除をうける者とがあったが、前者から発展した都市カザークはやがて漸減して20世紀初頭にはヤクーツクにのみ残されていた。後者は国境線沿いにスタニツァ（カザーク村）を形成する一線カザークとして発展し、数個のカザーク軍（казачье войско）に編成された。その歴史的形成過程については割愛する。シベリア・カザーク軍はいわゆるオレンブルク・イルティシ要塞線に沿った細長い地帯に、ザバイカル、アムール、ウスリーの各カザーク軍はザバイカル、アムール、沿海州の中国国境沿いに配置されていた。そのほかにエニセイ・カザークがクラスノヤルスクとイルクーツクの両市に配置されていた²⁾。1917年のシベリア・極東ロシアのカザーク住民およびカザーク軍勤務者数は次表の通りであった³⁾。

名 称 (単位千人)	住 民	軍勤務者
ザバイカル・カザーク軍	265	14.5
シベリア・カザーク軍	172	11.5
アムール・カザーク軍	49	3.5
ウスリー・カザーク軍	34	2.5
エニセイ・カザーク	約10	0.6
ヤクーツク・カザーク連隊	約3	0.3

各カザーク軍には軍参事会（войсковое правление）が置かれ、軍アタマンによって統轄されていた。ツァリーズムの下で軍アタマンとその下の部アタマンは任命制であったが、二月革命後の状況下で、任命によるアタマンほか役員は軍大会で解任され、カザーク自身がアタマンを選出するというカザークの本来的な姿を回復するに至った。こうして例えばガモフ（И. М. Гамов）は1917年の春にアムール・カザーク軍アタマンに選ばれた⁴⁾。

カザークは一般の農民よりかなり広い優良地を保証された特殊な身分であった。しかしその実態は必ずしも一様でなく、すでにアムール・カザーク軍では1905年に生活条件の劣悪さから、他身分との同権＝カザークの解体（расказачивание）の要求が一部に起こっていた⁵⁾。この問題は1917年の諸カザーク軍大会^{ウルク}の重要争点となった。カザーク身分とその特権の保持というカザーク上層、あるいは「旧カザーク派」の主張は、例えば9月にニコリスク＝ウスリースキーで開催された第3回ウスリー・カザーク軍大会で採択された、カザークは「永久不動の原則に立って」土地を所有したのであって、カザークの土地は「固有にして不可侵」である、との決議に見られる。これに対するカザーク下層、あるいは「新カザーク派」の主張は、4月の第1回ザバイカル・カザーク軍大会で採択された、「旧習の遺物、常備軍が存在する結果としてのカザーク身分は廃止され、すべての自由な市民と均一化されねばならない」とする決議に見られる。この対立は激烈で、ザバイカル

2) ССЭ, II, стлб. 426; *Азиатская Россия*, СПб., 1914, I, стр. 361-387. 沼田市郎訳編『アジアヤロシヤ民族誌』（彰考書院, 1945年）, 373-400ページ

3) СИЭ, т. 6, стлб. 820.

4) *Благовещенску сто лет*, стр. 515 (примеч.).

5) Из истории Амурского войскового казачьего съезда, ИА, 1955, № 2, стр. 110-120.

では「旧カザーク派」がまき返して8-9月の第2回軍大会では122対72でカザーク身分保持決議が採択されている⁶⁾。第3ヴェルフネウヂンスク・カザーク連隊長でアタマンを自称するセミョーノフがケレンスキーの命令を受けて、ザバイカルにブリャート人騎兵を中心とする部隊の編成を開始したのはこの時期のことである⁷⁾。ブリャート人カザークはロシアのザバイカル進出以来の古い歴史をもつ存在であるが、彼らは第1回軍大会決議を歓迎して脱カザーク化し、その後もコルニーロフ (Л. Г. Корнилов), カレーヂン (А. М. Каледин), セミョーノフの運動に冷淡であった⁸⁾。

シベリア・カザーク軍では9月10-21日にオムスクで開催された軍大会で、同軍出身のコルニーロフ將軍支持が叫ばれ、カザーク身分の保持、ソヴェトからのカザーク代表の召還が決議された。この決議はカザーク内部に分裂をもたらした。若年層は同決議を破ってソヴェトに結集し、「旧カザーク派」が結集する軍参事会に対抗し、さらに10月5日に軍参事会幹部を逮捕した。この紛争はオムスク労兵ソヴェト・カザーク部会を軍参事会附属カザーク・ソヴェトに改編することで妥協が計られた。のち前項で見たオムスクのソヴェト権力成立後(1月26日)、軍参事会は再逮捕された。3月1日(2月16日)に開催された第3回軍大会はこれを了承し、カザーク軍地域におけるソヴェト体制の樹立を決議した⁹⁾。しかしこの決議をめぐるカザーク内部の空気は不確定的ないし否定的で、第3回軍大会への各スタニツァ・村落からの付託要求書の集計によれば、ソヴェト権力支持の可否は47対48対20で割れる一方、憲法制定会議が117対5対7で圧倒的に支持された¹⁰⁾。

クラスノヤルスクではエニセイ・カザークの指揮官ソートニコフが1月に反乱を企てたが未然に阻止された¹¹⁾。イルクーツクのカザークの動向についてはすでにふれた。

軍に勤務するカザークの主力は前線で革命期を過ごした。前線からの帰還兵(фронт-вики)は革命的気分が強く、彼らの帰還によって上記の対立は当然流動した。シベリア・カザーク軍参事会の再逮捕を実行したのも帰還兵であった。このことも含めて、ザバイカル・アムール両州の状況を次に検討しよう。

ザバイカル州における十月革命

ザバイカル州の住民構成は複雑で、これまでに挙げた(ブリャートについては後出)いくつかの統計をまとめると州人口約90万人のうちカザーク住民が26.5万人(30%)、ブリャート人が20.4万人(23%)を占めていた。この複雑な住民構成はそのまま憲法制定会議の選挙結果にも現われた。次の表¹²⁾がそれである。シベリアの平均的得票構成と大きく違ってエスエル支持率が低く、また11月段階でもポリシェヴィキ組織は未成立で、統一組織としてのРСДРП 国際派の得票率は10%を割っていた。

6) ОРГВДВ, стр. 7, 12, 15-16.

7) Г. К. Гинс, *Сибирь, союзники и Колчак*, т. 1, ч. 1, Пекин, 1921, стр. 84; С. П. Мельгунов, *Трагедия адмирала Колчака*, ч. 3, т. 1, Белград, 1930, стр. 237.

8) Э. Д. Ринчино, *Бурят-Монголы Восточной Сибири*, ЖН, 1921 № 11 (109), стр. 3-4.

9) ХГВС, стр. 44-45, 57, 60.

10) В. М. Самосудов, *Установление Советской власти в Омске и области*, *История СССР*, 1967, № 5, стр. 117-118.

11) Познанский, *Очерки истории вооруженной борьбы ...*, стр. 66-67.

12) БУУСВ, стр. 218; *История Бурятской АССР*, II, Улан-Удэ, 1959, стр. 27-28.

ザバイカル	
エ ス エ ル	49,363 (50.2%)
ブリヤート民族委	17,083 (17.4%)
カザーク	12,854 (13.1%)
РСДРП 国際派	8,560 (8.7%)
カデット	4,111 (4.1%)
エヌエス	2,682 (2.7%)
メンシェヴィキ	2,154 (2.2%)
旧 儀 派	1,418 (1.4%)

イルクーツクの十月革命の項で見たように、イルクーツクでは強力な2勢力の対峙の中から連立政権構想が市街戦の幕間に現われたが、ザバイカルでは上記のような多勢力の分散、強力な勢力の欠如から連立はいわば必然的に生まれ、一定期間存続した。12月22日にチタで開催された農村住民・社会保安委・ゼムストヴォの合同州大会で形成された「人民ソヴェト (Народный совет)」がそれである。構成は労兵ソヴェトから15、農民から12、カザークから10、ブリヤート人とエヴェンキ人から8、都市自治体から5、合計50であった¹³⁾。

第1回ザバイカル州労兵ソヴェト大会は12月30日から翌年1月4日にかけて開催された。大会ではソヴェト権力樹立論は少数派にとどまり、「人民ソヴェト」参加決議が12対7対9で辛うじて採択された。また労兵ソヴェトの下に赤衛隊を編成することが決定された。「人民ソヴェト」参加の理由づけは、「開かれる可能性のある内戦を避けるため」であった¹⁴⁾。「人民ソヴェト」にはメンシェヴィキ・エスエルとともに РСДРП 国際派 (いわゆる『ノーヴァヤ・ジーズニ』派) 指導部のソコロフ (В. Н. Соколов) にも参加した。1月4日に「人民ソヴェト」は州内で臨時政府の諸権限を継承することを宣言したが、この宣言にも「人民ソヴェト」議長のメンシェヴィキ、ヴァクスベルク (М. Ваксберг) とともにソコロフらは署名している¹⁵⁾。ソコロフはのちに、ソヴェト権力を樹立するには「イルクーツクの援助が得られたとしても」まったくの力量不足であったこと、「それに加えて、公然たる日本の干渉と侵略という見通しが常に脅威としてのしかかっていた」ことを弁明として述べている¹⁶⁾。現に16日にはセミョーノフの「満州特別部隊」が国境を越えて州内に侵入している。しかし、これに対して「人民ソヴェト」がとった措置は、チタ進軍を思いとどまるよう説得するため使者を派遣したことであった。またその前日に「人民ソヴェト」は赤衛隊を武装解除している¹⁷⁾。

チタにはカザーク2個連隊のうち第1連隊が1月に帰還した。この連隊は反革命的将校に握られており、1月15日の赤衛隊武装解除はこの連隊の武力によるものであった。この

13) БУУСВ, стр. 526.

14) ОРГВДВ, стр. 35; Окунцов, Указ. соч., стр. 125.

15) Героические годы борьбы и побед..., стр. 35-36.

16) В. Соколов, Октябрь за Байкалом, ПР, 1922, № 10, стр. 391.

17) ОРГВДВ, стр. 37-38. 「人民ソヴェト」のセミョーノフとの対立面の一面的強調 (例えば Snow, *op. cit.*, p. 215.) は支持しがたい。

連隊の帰還は「人民ソヴェト」を強化した。これに対し第2連隊は革命的であり、将校選挙制を採用し、少尉補のジガーリン (Я. П. Жигалин) が選ばれて連隊長をつとめていた。この連隊は2月3日(16日)チタに到着すると他の部隊とともに守備隊長・反革命的将校の逮捕と「人民ソヴェト」の解散を実施した。ソヴェト諸組織委 (Комитет советских организаций) が臨時の政権として組織され、ポリシェヴィキと国際派、部隊と赤衛隊、労組の各代表がこれを構成した。こうして、革命化したカザークの力によってチタのソヴェト権力が樹立された。しかし数日後、カザーク師団参謀部その他が帰還すると情勢は複雑になった。反革命的将校はセミョーノフ軍に走った。第2連隊は解体状態にあった。イルクーツクから反セミョーノフ戦線を構築するために乗り込んだラゾは、第1アルグン連隊などの兵士と赤衛隊に依拠することになった¹⁸⁾。

国境地帯でセミョーノフ軍との一進一退が続いていた3月下旬-4月上旬に第3回州ソヴェト大会が開催され、州全域でのソヴェト権力の樹立、カザーク身分の廃止、赤軍組織が決定され、州人民委員会議が成立した。なおその間にチタのポリシェヴィキ党組織が形成された¹⁹⁾。

アムール州における十月革命

ブラゴヴェンチェンスク・ソヴェトは12月20-21日の総会の段階でも、同市の権力は市会に、アムール州の権力はゼムストヴォに属するとの決議を採択して、権力掌握意欲のないことを表明した。これに反発して兵士代表の大多数は退場した。22日の兵士ソヴェト緊急総会はソヴェト政権支持決議を採択した。労兵ソヴェトは1月5日に改選され、ムーヒンを議長として、ポリシェヴィキ・国際派16、エスエル6、メンシェヴィキ6から成る新執行委が形成された。同執行委は1月13日、極東ロシアの全権力は極東地方委に属し、各地の全権力は諸ソヴェトに属すると宣言した²⁰⁾。この過程でザバイカル州と同様にここでも帰還兵がソヴェトの革命化をもたらした。同じころ第2回極東地方ゼムストヴォ大会が開催されたが、この大会は、極東地方委を極東ロシアの権力として承認するとのクラスノシチョーコフ提案の決議を、沿海州代表の支持の下に1月12日に採択した²¹⁾。同日ゼムストヴォ・ビュローは解散させられた²²⁾。

他方、アムール・カザーク軍アタマンのガーモフを長とする軍参事会はすでに11月8日に州の権力掌握を宣言しており²³⁾、軍参事会・州ゼムストヴォとソヴェトとが拮抗する形となった。カザーク2個連隊は前者の側に掌握されてはいたが士気は低かった。ソヴェト側の武装勢力は赤衛隊と、解体過程にある守備隊の兵士、アムール河艦隊の水兵であった。革命派の伸長に対抗して軍参事会は1月17日に第4回アムール・カザーク軍大会を召集した。大会はソヴェト権力否認、ゼムストヴォ・市会の全権力掌握要求を決議した。

18) О. А. Лазо, Забайкальский (Даурский) фронт, ГВДВ, стр. 20-21; Я. П. Жигалин, Боевой восемнадцатый год, Там же, стр. 35-36.

19) История Бурятской АССР, II, стр. 38-39.

20) Благовеценску сто лет, док. 140, 145, 149.

21) 石光真清『誰のために』(龍星閣, 1959年)の次の記述はこのことを指すものである。「一月二十五日〔旧曆12日〕, 沿海州, アムール両州連合政治会議が開かれ, 急進派が勝って, 最高政治機関をハバロフスクに置いてレーニン政府の指揮下に入ることを決議した。」(49ページ)。

22) Бойко-Павлов и Сидорчук, Указ, соч., стр. 160.

23) ОРГВДВ, стр. 23.

この大会は反革命勢力結集の契機となるのであるが、それを背後で準備したのが中島正武・石光真清・鳥居肇三ら日本軍参謀本部・特務機関員の工作であったことは、石光の手記から知られる²⁴⁾。ニコラエフスクを本拠とする「在留邦人のキング」島田元太郎も、この時期ブラゴヴェンチェンスクに乗り込んで反革命派結集工作をさかんに行なった事実がある²⁵⁾。この大会の直後から反革命派の武装組織として自衛団が編成された。

ソヴェトは1月30日に州行政機関と銀行の引き渡しを要求した。ゼムストヴォ参事会職員はサボタージュをもってこれに応えた。ゼムストヴォは政権引き渡しを拒否しつつも、2月16日(3日)の会議で「連合州行政機関」を組織するという妥協案が通るほどに後退した²⁶⁾。翌日、ソヴェトによって「無政府反対闘争同盟(Союз борьбы с анархией)」組織が暴露され、22名の将校が逮捕され、武器が押収された²⁷⁾。

革命派の伸長を阻止せんとする動きは、金鉱業者組合副会長オレーニン(Оленин)ら資本家団体代表と、日本軍特務機関から起った。資本家団体代表は州ゼムストヴォ不信任を決議するとともに、秘かにアムール河対岸の中国軍当局に軍事介入を要請した²⁸⁾。日本軍特務機関は日本人居留民会の武装集団化をすすめた。2月27日の機関長石光の通信に「温和派後援ノ目的ヲ以テ本日武装セル日本義勇団ヲ編成セリ目下人員五十名ナリ²⁹⁾」とある。

2月25日(12日)から開催された第4回アムール州農民大会で労兵・農民両ソヴェトの合同が行なわれ、ムーヒンを議長とする州執行委が選出された。同執行委は3月5日(2月20日)にゼムストヴォの接收・幹部逮捕を実施した。緊迫する状況の中で、3月6日にカザーク連隊・自衛団・日本義勇団が反ソヴェト反乱に決起した。戦闘は12日まで続き、カザークの投降と、反革命派幹部・カザーク連隊本部・自衛団・日本義勇団の中国領への逃走をもって、ソヴェト側の勝利に終わった。この戦闘で決定的な役割を演じたのはアムール河艦隊水兵と、近くのイヴァノフカ村の農民であり、後者の主力は復員兵士であった³⁰⁾。

この反ソヴェト反乱は一般に「ガーマフの反乱」と呼ばれているが、ガーマフ自身について言えば、「軟派トシテ動モスレハ決心ヲ屈ゲントスル」、「優柔不断」な人物であり、石光の総括によれば、この「優柔不断」、とくにムーヒンら「拘禁シタル首領連」を「直ニ死刑ニ処セサリシコト」が「温和派失敗」の主要因であった³¹⁾。

この反乱の事前工作に日本軍特務機関と義勇団が果たした役割は大きく、反乱前日にブラゴヴェンチェンスク入りした池中堅三海軍少佐は次のように報告している。

「石光一行ノ行動ハ稍々過激ノ嫌ヒナキニ非サルモ又事情止ムナキモノアルガ如シ 何分当地ハ極東温和派ノ唯一ノ拠点ニシテ而モ大勢過激派ニ帰セントスル今日能ク大勢ヲ挽回シ得タルハ全ク日本ノ後援アリシ結果ナリ³²⁾」

24) 石光、前掲書、51ページ。

25) 在ヴラヂヴォストーク緒方書記生発(2月13日/1月31日)本野外相宛機密第2号。西比利亞政情I。

26) 石光通信(2月15/2日, 20/7日), 関東都督府参謀部普通報第12, 15号。都督府情報, II。

27) *ОРГВДВ*, стр. 44.

28) 石光、前掲書、91ページ。

29) 石光通信(2月27/14日), 前掲普通報第16号。都督府情報, II。

30) И. Безродных, *Амур в огне*, ч. 1, Владивосток, 1923, стр. 5-13; В. Н. Багров и Ф. Н. Сунгоркин, *Краснознаменная Амурская Флотилия*, М., 1976, стр. 33-36.

31) 石光通信, 前掲普通報第19, 21号。都督府情報, III。

32) 第5戦隊司令官発(3月8日/2月23日)軍令部長宛第41番。西比利亞政情, I。

反乱鎮圧後の17日、ソヴェト執行委は議長ムーヒンをはじめ各コミサールを選出した。次いで4月上旬に開催された州農民カザーク大会でアムール・カザーク軍の解散、カザーク身分の廃止が確認された³³⁾。

なお沿海州でも1月末の州農民カザーク大会でソヴェト権力が承認されたが、この大会に対抗してウスリー・カザーク軍大会が開催され、軍アタマンにカルムイコフ (И. П. Калмыков) が選出された。このカザーク軍も3月に前線からカザーク連隊が帰還してはじめて革命派が有力となり、カルムイコフはひとまず中国領に逃亡せねばならなかった³⁴⁾。

6 シベリア地方議会

12月にトムスクでエスエル主導の政権樹立の動きがあったことをすでに述べたが、ここで前史をふくめて、シベリア地方議会の形成と解散をとりあげておきたい。

シベリア地方主義 (сибирское областничество) は、ロシアの東洋学に顕著な足跡を残すヤードリンツェフ (Н. М. Ядринцев) とポターニン (Г. Н. Потанин) を創始者として、前世紀半ばに生まれた潮流である。シベリア地方主義者 (областники) は、シベリアの現状が本国=ヨーロッパ・ロシアに対する植民地であり、経済的に従属しており、最良のものが持ち去られる代りに最悪のものが差し向けられる関係が成立していることを批判し、シベリアは独自の工業、独自の立法機関と地方財政、高等教育機関をもつべきことを主張した。シベリア地方主義者は、しばしば分離主義者とみなされたし、ことに1865年に「シベリア分離事件」の容疑でヤードリンツェフ、ポターニンら多数が逮捕・投獄されるなどの弾圧を受けている。しかし、シベリアの国家的分離というより、ロシア内でのその自立と地位向上が彼らの基本的な主張であったというべきであろう³⁵⁾。

シベリア地方主義の傾向の諸団体、諸新聞はシベリア各地にあり、中でもヤードリンツェフによって首都で創刊され、のち1888年にイルクーツクに移された週刊紙『ヴォストーチノエ・オボズレーニエ』は多彩な執筆陣を擁して、大きな役割を演じた³⁶⁾。この新聞は、しかし、シベリアの1905年革命を鎮圧したメルレル=ザコメリスキー (А. Н. Меллер-Закомельский) 将軍の命令で1906年1月に停刊となった。シベリア地方主義の中心地となったのは、シベリアで唯一、高等教育機関が置かれ³⁷⁾、「シベリアのアテネ」とさえ呼ばれたトムスクであった。シベリア地方主義者が力を注いだ運動のひとつにゼムストヴォ設置運動があったが、トムスクはこの運動の中心を占め、1905年に「トムスク案」として知られるゼムストヴォ設置要綱案が作成されている。この案は、ヨーロッパ・ロシア並に県・郡ゼムストヴォを設置するだけでなく、その上に地方ゼムストヴォ (областное земство) を設置することを構想するものであって、立案に積極的に関与したポターニンの主張を大幅に盛り込んだものであった³⁸⁾。

33) *Благовещенску сто лет*, док. 170, 175.

34) Федорев, *Указ. статья*, стр. 97.

1) И. А. Якушев, *Григорий Николаевич Потанин. Его жизнь и деятельность*, Прага, 1927, стр. 21.

2) *ССЭ*, I, стлб. 543-544.

3) 1888年開設のトムスク大学と1900年開設のトムスク工専。

4) М. И. Альтшуллер, *Земство в Сибири*, Томск, 1916, стр. 320-321.

二月革命後の流動化状況の中で、シベリア地方主義者の多くはカデット、エスエルの両党に合流していったが、「ポターニン派 (потанинцы)」を自称する小グループも存在した。1917年のトムスクのメーデーには多くの旗に混ってシベリア地方主義のシンボルたる、白緑旗も見られたという⁵⁾。

シベリア地方議会のスローガンがはじめて具体的かつ大衆的に提起されたのは、普通選挙に基づき4-5月に開催されたトムスク県民集会 (губернское народное собрание) においてであった⁶⁾。この集会の決議は、シベリアが「連邦制原理に基づいて」全体としてのロシア共和国の「不可分の一部」を構成しつつ、地方立法機関としてのシベリア地方議会 (Сибирская областная дума) とそれに対し責任を負う行政機関を必要としていることを認めねばならない、と述べ、シベリアの「地方自決」の要綱を詳細に作成するために、近い将来における全シベリア地方大会の召集をトムスク県執行委員会に委任する、としている⁷⁾。

トムスク県執行委員会 (トムスク社会保安委員会の後身、議長ガン) において、大会召集のイニシャティヴを握ったのは、エスエルで自身シベリア地方主義者のシャチーロフ (М. Б. Шатилов) であった。

最初のシベリア地方大会は8月2日に召集されたが、開会時まで所期の目標にほど遠い67名の代表しか集まらなかったため、準備協議会に切り換えられ、セレブレンニコフ (И. И. Серебренников) の「シベリアの自治について」とザハーロフ (Е. В. Захаров) の「シベリアの自治制度の基本原則について」の両報告と討議が行なわれ、遅くも10月15日までに改めて大会を召集することを決め、ポターニンを議長、シャチーロフ、ザハーロフ、ノヴォムベルクスキー (Н. Я. Новомбергский) を副議長とする組織委員会を選出して、低調なうちに8月9日閉会した⁸⁾。

8月の協議会で採択された第1回シベリア地方大会に関する要綱は、自治機関 (ゼムストヴォ、都市、カザーク、少数民族)、政党、協同組合、職業団体、学術団体を母体とする代表派遣をうたっていた。これに基づいて10月8日に召集された第1回シベリア地方大会には多様な代表が参加した。代表169名の民族別内訳は、ロシア人110、タタール人17、ウクライナ人13、キルギース人 (カザフ人の当時の呼称) 9、ユダヤ人5、ポーランド人4、アルタイ人2、ブリヤート人1、テレウート人 (アルタイ諸族の1) 1、また所属 (同調を含む) 党派別内訳は、エスエル87、社会民主党25 (うちメンシェヴィキ10、ポリシェヴィキ2、所属を示さぬもの13)、エヌエス8、カデット4など (以下略) であった⁹⁾。大会はシャチーロフとザハーロフの報告と討論のち、「シベリア地方制度に関する規程」を採択した。それは第1条で「ロシア共和国の一体性のもとで、その個々の部分は、民族

5) В. Вегман, Областнические иллюзии, рассеянные революцией, *СО*, 1923, № 3, стр. 94.

6) Якушев, *Указ, соч.*, стр. 25-26. 「県民集会」は県ゼムストヴォという古い名称に代るものとしてトムスク社会保安委処理ビュローが発案した同県独自の名称である。Зубашев, *Указ. статья*, стр. 102.

7) *ХГВС*, док. 5.

8) И. А. Якушев, Февральская революция и сибирские областные съезды, *ВС*, II (1927), стр. 21-25; Вегман. *Указ. статья*, стр. 96-99.

9) *ХГВС*, док. 11.

的あるいは領域的自治の原則に立って組織されねばならない」とし、以下でシベリア地方議会の権限、それと中央政府の権限との区分を定めている¹⁰⁾。大会はポターニン、クルトフスキー、ガン、シャチーロフ、ザハーロフら7名（ほかに候補6名）から成る執行委員会を選出し、10月17日に閉幕した。候補の中にヂェルベルの名が見える。オムスクのエスエル幹部として頭角を現した人物である¹¹⁾。

第1回大会閉幕の1週間後に首都十月蜂起が起こった。全ロシア憲法制定会議までにシベリア全域でソヴェト権力が樹立される危惧ありと見た執行委員会は、緊急シベリア地方大会を召集して、独自のシベリア地方政権の樹立を試みた。大会は12月6日にトムスク神学校で開催された。集まった代表155名の母体別内訳は、執行委員会その他上部機関から30、ゼムストヴォから10、都市自治体から21、協同組合連合会から26、食糧委員会から7、土地委員会から6、農民ソヴェトから21、農兵ソヴェトから2、農兵労ソヴェトから2、農兵労キルギース人ソヴェトから2、労兵ソヴェトから7、民族組織から22、鉄道員組合から7、郵便電信組合から7（以下略）であり、党派別ではエスエル92、社会民主党27、エヌエス11、アラシ（カザフの民族政党）3、連邦自治主義者2、無党派社会主義者2、カデット2、無党派10、不明6であり、エスエルが圧倒的に多かった¹²⁾。大会は立法機関たるシベリア地方議会と、執行機関たるシベリア地方評議会がシベリア内の最高権力であることを決議した。採択された「シベリアの臨時統治機関に関する規程¹³⁾」によれば、「ロシア連邦共和国（Российская федеративная республика）の自治的一地方」としてのシベリアの統治体制は、シベリア憲法制定会議が、全ロシア憲法制定会議に従ってこれを決定するものとし（第2条）、それまでの暫定措置として、緊急シベリア大会の決定によって召集される臨時シベリア地方議会と、後者によって選出され、それに対し責任を負うシベリア地方評議会（Сибирский областной совет）とがシベリア内の最高権力である（第3条）。しかし臨時シベリア地方議会召集までの、当面必要な更なる暫定措置として、この大会で選出される臨時シベリア地方評議会が発足することになった。それは財政・経済・民族・軍事の各評議会を下部機構としてもち、「権力の実現」を任務とする（第21-22条）というもので、ソヴェト権力に対抗する新しい政府の旗上げがここに宣言されたことになる。

臨時シベリア地方評議会の構成は、ポターニン（議長）、ヂェルベル、ノヴォシヨーフ（А. Е. Новоселов）、パトゥシンスキー（Г. Б. Патушинский）、シャチーロフ、エルマコフ（А. А. Ермаков）、ザハーロフ（総務部長）であった。ポターニンは名目上の存在であり、ポターニンとエヌエスのパトゥシンスキー以外は、全員エスエルであった¹⁴⁾。軍事評議会の長には、キーエフに出張中のクラコヴェツキーが充てられた。その暫定性は明らかであるが、実質上、これはエスエル政府と言ってよい。

12月の大会の決議によれば、召集されるべきシベリア地方議会は「エヌエスからボリン

10) Якушев, Февральская революция и сибирские областные съезды, стр. 29-30.

11) Вегман, Указ. статья, стр. 103.

12) ХГВС, док. 12. 本来の「ポターニン派」=連邦自治主義者が僅か2名であることに注意。

13) Там же, док. 13.

14) Вегман, Указ. статья, стр. 108.

ェヴィキまでをも含み、諸民族代表を加えた全シベリア社会主義権力」であり、「有産分子 (цензовые элементы) の参加しない、専ら民主勢力から構成される」ものであると強調された¹⁵⁾。その選出母体と議員数の配分は同じ決議の中で細かく規定されているが、ゼムストヴォ、市会、各種ソヴェト、前線にいるシベリアの各師団、カザーク軍、民族団体、郵便電信組合、鉄道員組合、協同組合、学生団体などが母体とされた。議会の召集は1月7日とされた。有産分子の排除と、寄せ集めの構成はカデットの離反を招いたし、他方ポリシェヴィキは政治運動としてのシベリア地方主義そのものに疑念を抱いて反発した。

シベリア地方議会の有力な支持勢力は協同組合であった。大戦中に急成長したシベリアの協同組合組織は1916年に、ノヴォニコラエフスクにおいて、連合体「ザクプズブイト (Закупсбыт)」を結成した。1917年に傘下の消費生協組合員は約108万人にも上った¹⁶⁾から、協同組合組織は無視しえぬ経済的力量をもった。シベリア地方議会の協同組合代表に22もの議席が一括して与えられたことはこのことと無関係ではなからう。このシベリア地方議会への代表選出と態度決定のため、1月6日にノヴォニコラエフスクに協同組合大会が開催された。代議員88名のうち75名はエスエル党员とその同調者であったと言われる¹⁷⁾。大会は、パトゥシンスキーの報告を聴いたのち、(1)シベリア地方議会とシベリア憲法制定会議への参加、(2)人民委員会議政権を否認し自治シベリアを承認する立場に立つすべての「社会主義政府」に協力する、(3)協同組合としてシベリア政権に無利子貸付の財政援助を行なう(組合員100人未満の組合から5千ルーブリ、100-200人の組合から1万ルーブリ等々)、(4)22議席の配分、を決定した¹⁸⁾。

地方評議会は自らの軍事的支柱として前線のシベリア諸部隊に期待を寄せ、彼らを引きつけようと手を尽したが、工作は失敗に終わった。北部方面軍の中にあつた第12軍の1月8日の軍大会は、兵士ソヴェト執行委附属シベリア兵士執行委 (ИК сибиряков при Иско-мсол) の結成、自治シベリアに反対する情宣活動のための同メンバーのシベリア派遣を決議した¹⁹⁾。

シベリア地方議会は、召集予定日までに参加者が集まらず、開会は2月1日に延期された。1月20日ごろまでに約100名が集まったので、開会まではエスエル・フラクション、民族フラクションなどの会議が行なわれた²⁰⁾。

ツェントロシビーリとトムスク周辺の諸ソヴェトは地方議会解散を要求した。ツェントロシビーリは1月4日づけのトムスク・ソヴェト宛電報で、「シベリア政府を宣言しようとする一握りのブルジョワ・インテリゲンツィヤの企図と断乎として闘う²¹⁾」との姿勢を示した。トムスク・ソヴェトはシベリア地方議会に対し不決断な態度をとったので、不決

15) ХГВС, док. 13.

16) В. Махов, Потребительская кооперация Сибири в прошлом и настоящем, СО, 1923, № 4, стр. 147.

17) С. Парфенов, Гражданская война в Сибири, 1918-1920, М., 1924, стр. 13.

18) ХГВС, док. 22.

19) Вегман, Указ. статья, стр. 110.

20) Гинс, Указ. соч., т. 1, ч. 1, стр. 74.

21) БЗС, док. 186.

断に業を煮やした西シベリア・ソヴェト執行委は議長エヌ・ヤーコヴレフを派遣し、何が何でも地方議会を召集前に解散させるよう強く圧力をかけた。ヤーコヴレフの到着でトムスク・ソヴェトは活発化した。

1月25日から26日にかけての夜、議長に内定していたヤークシェフを含むシベリア地方議会メンバー16名、シベリア地方評議会メンバーのバトゥシンスキーとシャチーロフが赤衛隊・革命的兵士・外国人国際主義者部隊の武力によって逮捕された²²⁾。

逮捕をのがれた地方議会・地方評議会メンバーは秘密裡に地方議会の会議を開き、「臨時シベリア政府」を「選出」した。作成された名簿には事前の了承も取りつけてない人名も多数含まれていた。エスエル・フラクシオンはこうした異常事態の下での「選出」に反対を表明したが、結局、ヂェルベルに妥協した。主要な人事は次の通りであった。首班兼農業ヂェルベル、外務ヴォロゴツキー、軍事クラコヴェツキー、内務ノヴォジョーロフ、大蔵ミハイロフ (И. А. Михайлов)、厚生クルトフスキー、運輸ウストルゴフ (Л. А. Устрогов)、食糧セレブレンニコフ。民族担当は2種類置かれ、土着民族担当にチベル=ペトロフ (В. Д. Тибер-Петров)、非領域民族担当にスリマ (Д. Г. Сулима)²³⁾。

委任を受けてヂェルベルが起草したと言われる「臨時シベリア地方議会の宣言²⁴⁾」はこの段階のシベリア・エスエルの綱領路線を定式化したもので、ポリシェヴォキと左派エスエルが憲法制定会議を蹂躪したことへの抗議が冒頭に置かれ、憲法制定会議の擁護と活動再開、憲法制定会議による民主的平和、義勇制シベリア軍の創出、民族問題の解決、地主地の無償譲渡、等々が記されている。

このあとヂェルベルら数名はハルビンへ向かった。ヴォロゴツキー、クルトフスキー、ミハイロフ、セレブレンニコフは選ばれたことも知らずに、またソヴェト権力にも知られずに、西シベリアに残っていた。ヂェルベルはハルビンで「臨時自治シベリア政府」旗上げの機会を狙って工作することになる。他方ノヴォニコラエフスクを拠点として「臨時シベリア政府西シベリア委員部」が形成され、これが西シベリアに形成される非合法武装集団の結集体になってゆくのである。

こうして前項で見たセミョーノフ、カルムイコフ、この項で見たヂェルベル、そして二月革命も十月革命も乗り切ったホールヴァトらが、ハルビン・ソヴェト崩壊後の中国東北部においてそれぞれ反革命の運動を開始することになり、西シベリアでも別個に同様の運動が抬頭する。

補論 民族運動の展開

ロシア人によって征服され、^{ヤサーク}貢納を徴発されたシベリア先住諸民族・諸種族は「^{イノローフイ}異族人」としてツァーリズムの身分法体系の下に組み込まれた(1822年の「異族人令 [Устав о инородцах]」によれば「^{フロヂャーチエ}浮浪民」・「^{コチエウイエ}遊牧民」・「^{オセードルイエ}定住民」の3つに類別された)。シベリアの人口にしめる「異族人」の比重はロシア人の進出によって18世紀初頭段階です

22) ХГВС, док. 18; Познанский, *Очерки истории вооруженной борьбы...*, стр. 64.

23) Гинс, *Указ. соч.*, т. 1, ч. 1, стр. 75-78.

24) ХГВС, док. 23.

でに50%を割り、革命前の段階で10.4% (1911年の統計) にまで下っていた。それらの諸民族・諸種族は多種多様な少数者集団であった。その中で比較的大きな集団はブリヤート、ヤクート、アルタイの3民族であって、1911年の統計では、ブリヤート人が33万人余 (この数字は過大で27.5万人とする説がある)、ヤクート人とアルタイ諸族 (後者は「タタール人」として一括されていた) がそれぞれ24万人余となっている。ブリヤート人はザバイカル州とイルクーツク県に集中 (前者に約60%、後者に約40%)、ヤクート人はヤクーツク州に集中 (同州人口の87%を占めた)、アルタイ諸族はトムスク・トボリスク・エニセイ県に分散して居住していた¹⁾。ここではブリヤート人と、トムスク県最南部オーピ河源流地域 (今日のゴールノ・アルタイ自治州) のアルタイ人の動向について簡単にふれておきたい。

二月革命によってもたらされた状況下で、民族的自立を求める動きが活発になった。二月革命直後、ザバイカル州ブリヤート・モンゴル人社会活動家私的会議がチタに開催されたのはその一例である。この会議は3月6日、全ブリヤート民族大会召集組織委員会を結成し、議会 (セイム) を有する民族自治を達成すること、遅くも6月15日までに全ブリヤート民族大会を召集することを決定している²⁾。また、4月7-12日にイルクーツク県ブリヤート・モンゴル人住民代表者大会がイルクーツクで開催された。そこでは次の決議に見られるツァリーズムの民族政策についての批判に立って、自立的民族組織形成が提起されている。「旧政府のブリヤート人に対する土地政策はロシア化を基調に実施され、かかる目的のためにブリヤート人、移民、古参住民^{スタロジ-チエリ}のそれぞれの土地の堪えがたい混淆が人為的につくりだされた。この混淆を利用してツァーリ政府はのちに移民・ブリヤート混合の郷をつくったが、それは移民とブリヤートの相互関係を極度に尖鋭化させた。……全体として旧政府の政策は人為的に土地不足を生み、それはブリヤート人の経営に危機をもたらした。……上記のことを考慮して大会は、(1) ブリヤート人が農業以前に事実上利用していたすべての土地の返還の必要……【以下略】を主張する³⁾」。この大会はイルクーツク県 (社会团体) 執行委にブリヤート人部を組織すること、地元には旧「スチェプナーヤ・ドゥーマ」の領域に合わせてアイマク (аймак, 郡に相当) 社会保安委、および住民自身によって定められる境界内にホシュン (хошун, 郷に相当) 委員会を組織することを決議した⁴⁾。「スチェプナーヤ・ドゥーマ (степные думы)」とは、1822年の「異族人令」によって定められた「遊牧民」行政の機関ですでに解体していたものである。

こうして二月革命直後からブリヤート人のあいだから民族自治と土地回復への志向が強く表明された。4月にチタで開催された第1回全ブリヤート人大会は、ブリヤート民族自治計画を採択した。それによればザバイカル州とイルクーツク県のブリヤート人は「ブリヤート・オログン・ツォグルガン」なる民族議会をもつ単一の領域的自治を獲得するものとされた。また、組織委員会に代って臨時ブリヤート民族委員会が置かれた⁵⁾。

1) 沼田市郎訳編, 前掲書, 161-169 ページ。Серебренников, Указ. соч., стр. 60.

2) РНВ, стр. 431-432.

3) Там же, стр. 436-437.

4) ХГВС, стр. 34.

5) История Сибири ..., III, стр. 493.

臨時政府は民族自治に否定的な態度をとった。ブリヤート民族会議長リンチノ (Э. Д. Ринчино) は6月13日に臨時政府に宛てた電報の中で、内務省が進めていた「スチュブナーヤ・ドゥーマ」復活案を批判して、ソモン(村)―ホジュン(郷)―アイマク(郡)の再組織を主張している⁶⁾。臨時政府が6月17日に定めたゼムストヴォ導入の法令に民族的地方自治機関の規定はなかったが、ブリヤート人はホジュン委、アイマク委を創出した。またアルタイ人はアルタイ山地ドゥーマ (Алтайская горная дума) を創出した⁷⁾。アルタイ人の民族運動は、山地ドゥーマの名誉会員にポターニンを選んだことや、その創出を決めた7月のビイスクの「異族人」大会でシャチーロフが祝辞を述べていること、エスエル党トムスク県委員会がエスエル綱領支持と憲法制定会議におけるシャチーロフ支持を要請したのに対し、山地ドゥーマはそれを了承していることなどに見られるように、エスエル、シベリア地方主義者と結びつきながら展開されていった⁸⁾。

10月と12月のシベリア地方大会が民族団体代表も参加して開かれたことはすでに見た。1918年1月に召集予定のシベリア地方議会には次の民族団体代表の参加が予定されていた。「中央キルギース委(3名)、イルクーツクとザバイカルのブリヤート民族委(各2名)、ヤクート民族委(4名)、アルタイ山地ドゥーマ(2名)、ミヌシンスクの土着種族[ハカース人を指す](2名)、タタール(5名)、その他の組織された土着種族(各1名)、各少数民族の全シベリア的民族政治組織(各2名)⁹⁾」。トムスクに集まった民族団体代表にはキルギース人、ブリヤート人、ヤクート人など「土着民族」のほかに、ポーランド人、ウクライナ人、植民ドイツ人が含まれ、全体で民族フラクションを形成した¹⁰⁾。民族フラクションの要求は、ヂェルベルの立案による「臨時シベリア地方議会の宣言」にも、臨時シベリア政府の構成(2種類の民族担当省を置く)にも現われた。後者についてはふれた。前者の該当部分は次のように書かれている。「(а) 土着諸種族 (туземные племена) の保護と保存に関する社会的措置の実施、(б) 非領域的諸民族 (экстерриториальные национальности) には、全国家的立法基準の範囲内での法人資格の自治共同団体の結成権と、民族生注の全分野における完全な民族的=個人的自治を附与すること¹¹⁾」。ブリュン綱領として知られる民族問題綱領の後半部分における精密な定式化と、粗雑で外在的な前半部分とが対照的である。こうして、内容的には問題を含むが、ともあれシベリアのエスエル、地方主義者の運動は民族運動の枠組としての民族組織をそれとして取り込もうとした。

ソ連の歴史学は、民族運動の先進分子がソヴェト政権樹立の闘争に加わったこと、反動分子がそれに敵対したことを強調している。前者の例として、ブリヤート民族委員会イルクーツク支部メンバーのダンチノフ (Г. Данчинов) らが、イルクーツクの12月闘争と権力移行後、同委員会を脱退したこと、やはりブリヤート人革命家のランジュロフ (Ц. Ц. Ражуров) がセレンガのアイマク参事会を見棄てて、トロイツコサフスクのソヴェトの活動

6) РНВ, стр. 434.

7) ССЭ, II, стлб. 150.

8) А. П. Потапов, *Очерки по истории алтайцев*, М.-Л., 1953, стр. 377-379.

9) ХГВС, док. 13.

10) Гинс, *Указ. соч.*, т. 1, ч. 1, стр. 74-75.

11) ХГВС, док. 23.

に身を投じたことを挙げている¹²⁾。他方の例として、アルタイ人「ブルジョワ民族主義的インテリゲンツィヤ」と、「バイ」・「ザイサン」などの搾取者身分、反革命分子が1918年2月にゴールノ・アルタイ（山地アルタイ）の分離、「オイロト共和国」樹立を画策したことが指摘されている¹³⁾。いずれの場合も内在的な検討を要する問題だが、1917年のポリシェヴィキが民族運動の枠組に分解をもたらしたことは事実であろう。しかもその場合、次のような領域の問題が残されたままであることを重視せねばならない。

1917年10月に行なわれた全ブリャート人大会でリンチノは次のように発言している。「この夏、異族人は土地問題で全ロシア農民大会の観点に立っていたにもかかわらず、ザバイカル中にブリャート人の分与地・官有貸付地の暴力的占拠の波がおし寄せた。そのさい占拠を行なったのは時として比較的多くの土地をもつ農民であった。……農民たちによるブリャート人の分与地の占拠の結果、種々のブリャート人集落^{ウールス}の約500人の男女が文字通り街頭に放り出された……。ザバイカルの農民の暗愚な大衆は、彼らによってツンドラやステューピに駆逐されてやむなく牧畜業を営んでいる異族人が、彼ら優良地を所有して農業を営む者とはまったく違った分与地を必要としていることを全然理解していない。農民は異族人が大部分の場合農業にまったく適しない草の茂ったステューピを20-30デシヤチーナ所有しているからといって、異族人を地主扱いしているのである……¹⁴⁾」。

ザバイカルに1918年に成立したソヴェト権力は、「プリレスキ」（＝自己に有利な境界線の引き直し）を求める農民、父祖の土地の返還を求めるブリャート人、軍用予備地を手放したくないカザークの3者のあいだに立たされた¹⁵⁾。だが問題は狭い意味の「土地」政策に限られるのではなく、もっと根深いものであった。

む す び

クラスノヤルスクを出発点として確立されていったシベリアのソヴェト権力は、12月のイルクーツクでの士官学校生の反乱鎮圧と、1月のトムスクでのシベリア地方議会解散とをもって、重要拠点の制圧を基本的に終えた。この勝利の上に立って、ツェントロシベリヤは2月23-28日（10-15日）に第2回全シベリア労兵農カザーク・ソヴェト大会をイルクーツクに開催した。大会は地方議会解散を反対3の圧倒的多数で了承した。プレスト講和については併合主義的条件をのもうとしている中央政府は「致命的な誤り」を犯すものだととして、それに反対するベ・シュミヤツキー提案の決議を満場一致で採択した。大会は「はじめてのソヴェト・シベリア憲法」と呼ばれたソヴェト権力組織案を採択した。最後に、ポリシェヴィキ22、左派エスエル9、（うちマクシマリスト2）、アナキスト2、計33名から成る新構成のツェントロシベリヤを選出し、「シベリア・ソヴェト共和国人民委員会」を指名した。その首班兼ツェントロシベリヤ議長にはシュミヤツキーが、しかしその直後に代ってエヌ・ヤーコヴレフが就任した¹⁾。軍事人民委員ラゾの総指揮下に対セミ

12) *История Сибири ...*, IV, стр. 60.

13) *Потапов, Указ. соч.*, 384.

14) *РНВ*, стр. 438-439.

15) В. Соколов, *Октябрь за Байкалом*, стр. 396-397.

1) В. Виленский-Сибиряков, *Борьба за советскую Сибирь (Центросибирь)*. 1917-1918 гг., М., 1926, стр. 5-11.

ョーノフのザバイカル戦線を強化することがシベリア・ソヴェト政権の次の緊急任務となった。

ヴラヂヴォストーク、次いでハバロフスクを拠点とした極東ロシアのソヴェト権力は、ゼムストヴォを利用する戦術をも採用しつつ各地のソヴェト化を推進した。この戦術は日本軍参謀本部の分析によれば「哈爾濱ニ於ケル痛撃ニ鑑ミ」た妥協的方针なのであった²⁾。極東地方委はブラゴヴェシチェンスクでの反ソヴェト反乱の鎮圧に全力を注ぎ、サハリン州・カムチャトカ州にもソヴェト権力をもたらし、4月に第4回労兵農カザーク・ソヴェト大会をハバロフスクに開催することになる。

イルクーツクの政権もハバロフスクの政権もそれぞれ外務人民委員部を設けた。これは今日、割拠主義的傾向として否定的評価が与えられている³⁾。またブレスト講和批判は極東ロシアでも強かった。第7回党大会に出席したネイブートはこの問題についてのアンケートに、「講和の調印に反対。大衆も同じ。大衆は日本の脅威のもとに生活しているから」と書いている⁴⁾。これはシュミツキーやネイブートが偶々「左翼共産主義」に与したということではなく、左派エスエルなどの統一戦線の上に成り立っているこの地域ソヴェト権力が、諸勢力の結集なしには帝国主義と対決できないことを現実的に認識していたことを物語るものであろう。

以上によってシベリア・極東ロシアの十月革命の経過と諸特徴を概観的にせよ捉えたわれわれは、次の局面—本格的な内戦と干渉戦の開始と展開⁵⁾—に踏み込みうる地平に立つことになった。

略記一覧*

(1) 史料集・論文集・事件日誌・辞典

БЗС=Большевики Западной Сибири в борьбе за социалистическую революцию. Сб. документов и материалов, Новосибирск, 1957.

БУУСВ=Борьба за установление и упрочение Советской власти. Хроника событий. 26 октября 1917–10 января 1918 г. М., 1962.

ВОСР=Великая Октябрьская социалистическая революция. Документы и материалы, М., 1957–1963.

ВОСР, После=Революционное движение в России после свержения самодержавия.

ВОСР, Апрель=Революционное движение в России в апреле 1917 г. Апрельский кризис.

ВОСР, Май-июнь=Революционное движение в мае-июне 1917 г. Июньская демонстрация.

ВОСР, Июль=Революционное движение в России в июле 1917 г. Июльский кризис.

ВОСР, Август=Революционное движение в России в августе 1917 г. Разгром корниловского мятежа.

ВОСР, Сентябрь=Революционное движение в России в сентябре 1917 г. Общациональный кризис.

²⁾ 参謀本部「絶東露領ニ於ケル過穩兩派ノ勢力概要」。西比利亜政情, I。

³⁾ Героические годы борьбы и побед..., стр. 38.

⁴⁾ Большевистские организации накануне VII съезда РКП(б), ИА, 1958, № 3, стр. 26.

⁵⁾ 次の局面では本稿で対象の外に置いた農村部が否応なしに政治の舞台となるであろう。

* 長尾, 前掲書, および関, 前掲書の略記方式を一部踏襲した。

- ВОСР, Накануне=Революционное движение в России накануне Октябрьского вооруженного восстания.
- ВОСР, Шествие=Триумфальное шествие Советской власти, ч. 1-2.
- ВОСРХ=Великая Октябрьская социалистическая революция. Хроника событий, т. 1-4, М., 1957-1961.
- ГВДВ=Гражданская война на Дальнем Востоке (1918-1922). Воспоминания ветеранов, М., 1973.
- Дальистпарт=Дальистпарт РКП. Сборники материалов по революционному движению на Дальнем Востоке, кн. 1-3, Владивостоке, 1923-1925.
- ДВП=Документы внешней политики СССР, т. 1- М., 1957-
- ОРГВДВ=Октябрьская революция и гражданская война на Дальнем Востоке. Хроника событий 1917-1922 гг., М.-Хабаровск, 1933.
- РНВ=Революция и национальный вопрос, т. 3, М., 1930.
- СИЭ=Советская историческая энциклопедия, т. 1-16, М., 1961-1976.
- ССЭ=Сибирская советская энциклопедия, т. 1-3, Новосибирск, 1929-1932.
- ХГВС=Хроника гражданской войны в Сибири, 1917-1918, М.-Л., 1926.
- 哈運資料=南滿洲鉄道株式会社哈爾濱事務所運輸課編『東支鉄道を中心とする露支勢力の消長』, 上巻, 大連, 1928年。

(2) 外務省記録 (外務省外交史料館所蔵)

西比利亞政情, I, II=露国革命一件, 出兵関係別冊, 西比利亞政情, 第1-2巻 (MT/1/6/3/24/13/21)。
都督府情報, II, III=露国革命一件, 出兵関係別冊, 関東都督府及朝鮮総督府情報, 第2-3巻 (MT/1/6/3/24/13/17)。

(3) 雑 誌

- ВИКПСС=Вопросы истории КПСС, М.
- ВС=Вольная Сибирь, Прага.
- ЖН=Жизнь национальностей, М.
- ИА=Исторический архив, М.
- КиС=Каторга и ссылка, М.
- ПР=Пролетарская революция, М.
- СА=Северная Азия, М.
- СО=Сибирские огни, Новониколаевск/Новосибирск.

追記。本稿脱稿後, В. Т. Агалаков, *Советы Сибири (1917-1918 гг.)*, Новосибирск, 1978. に接し, シベリアの歴史学の近年における研究の積み重ねは本稿のテーマに関しても着実であることを感じとることができた。本稿において粗い素描に終わっている部分は別の機会に論じ直したい。

Октябрьская Революция в Сибири и на Дальнем Востоке

Тэруюки Хара

История революции и контрреволюции 1917-1922 годов в Сибири и на Дальнем Востоке является не только неотъемлемой частью истории Октябрьской революции и гражданской войны в СССР в целом, но и основным звеном в цепи новейшей истории Восточной Азии. Автор попытается исследовать ее разнообразные стороны

с обширной точки зрения. В настоящей статье автор поставил своей задачей осветить некоторые вопросы ее первого периода — с марта 1917 г. по март 1918 г., то есть от свержения царизма до установления Советской власти. Статья состоит из шести глав.

Во главе I исследуется политическая обстановка после февральской революции, особенно взаимоотношение между местными Советами и Комитетами общественной безопасности. Во главе II исследуется процесс образования самостоятельных организаций большевиков. В Сибири и на Дальнем Востоке, где обладало объединенчество и примиренчество, руководящую роль сыграли Красноярская и Владивостокская организации. Во главе III исследуется процесс образования областных объединений и революционизирования местных Советов. В апреле-мае 1917 г. образовали объединения: западносибирское, восточносибирское и дальневосточное, а в октябре — всесибирское. Революционизирование Советов вызвало обострение между революционными Советами, с одной стороны, и соглашательскими Советами и Временным правительством, с другой. Во главах IV-V исследуется процесс установления Советской власти в главных городах Сибири и Дальнего Востока. Для установления власти Советов потребовалось длительное время. В Омске, Иркутске и Благовещенске имели место контрреволюционные восстания юнкеров или казаков. В Благовещенске японские “добровольческие дружины” принимали деятельное участие в его подготовке. Автор анализирует не только советские данные, но и японские архивные материалы об этих событиях. В последнем главе исследуется история Сибирской областной думы. Роль казаков и областников в революции важна для исследования следующего периода — подготовки и начала гражданской войны и интервенции.

В Сибири и на Дальнем Востоке установление власти Советов шло сложным путем. Это объясняется разными причинами. Автор анализируя итоги выборов в Учредительное собрание, освещает особенности общественно-политической жизни Сибири и Дальнего Востока.